
東方槐無夢

ジラート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方槐無夢

【Nコード】

N2043Y

【作者名】

ジラート

【あらすじ】

東方の永琳と夫婦喧嘩したかったからはじめた。

なお出るキャラ全て好意的に見られるのは個人的に非常にむず痒い為、性格不一致による嫌悪・敵対関係などもあり好きなキャラが鬼畜外道になっても哀しみを背負って見ていただけたら幸いです。またそれなりに独自解釈がありますよっと。

そんなこんなで暇な方はどうぞ

1話　そして彼女は来た（前書き）

えーりん！かわいいよ！えーりん！

1話　そして彼女は来た

雪が降りそそぐ昼下がり、俺は同じ職場の先輩に話を持ちかけた。

「ほう、最近寒気が感じると？」

「ええ、いや風邪とか熱とかはないんですよ」

冬は本番であるが、むしろ秋から冬にかけての期間が一番風邪を引きやすい。

というか冬本番になれば馬鹿をしない限り風邪など引くまい。

先輩は言葉を先回りされたのか小さく「ふむう」と呟いた。

普段から鋭い瞳をさらに引き絞り右手の人差し指で軽く唇を撫でている。

先輩独特の癖で何かを考えるとよくこのモーションをとるのだが、傍からみるとかなり怖い。

傍から見るとガンつけているようにも見えなくもない。

視線が異様に鋭い以外は完璧なのだ、顔のパーツもいいし、性格も堅実で気配りできるタイプ。

が、その瞳の鋭さが災いして先輩が何か話すたび、皆背筋を伸ばし直立スタイルをとるのである。

……主任ですらそうなのだからもはや救いようがない。

そういう俺も最初はその目線にビビッて同時入社した同僚の中で一番腰が引けてたが、今では一番仲がいいのもその先輩である。

世の中わからんもんだ。

そんな先輩は俺の質問を程よく咀嚼したのかこちら目を向けた・・・
・・つもりなんだろうな、睨んでる様にしか見えないが。

「もしかして、アレか？」

ぬ、鋭い。

もうちよつと話が二転三転するかと思っただが、いきなり確信をついてきた。

さすが先輩、無駄にハイスペック。

軽く目を見開いている俺に先輩はすつと目を細めた・・・こえーよ
そんな俺には目もくれず先輩は口を開いた。

「幽霊でもでたか？」

そうである。そうなのである。

真に遺憾ではあるがこの俺には多少ではあるが靈感というのが存在する。

別に欲しくもなかったが、母親の叔母にあたる人が昔霊媒師をしていたそうな、胡散臭せえ。

そしてそれに血の流れを汲んで俺にもそういう才覚に目覚めたといいたいのだが、異能は女に強く受け継がれる性質を持つという。

まあ端的に言おう、要するに単純に勘が鋭い程度である。

幽霊もほぼ見えない、たまに視線の端に居るはずのない人影が歩い

てたり、視線を向けられて背筋が凍ったりその程度である。
むしろ妹のほうが血をよく受け継いでいる。

二人で買い物に行った際、突然悲鳴を上げながら走り出す妹を俺は
呆然と見ている事しかできなかった。

そんな事情をしる先輩がその結論に至ったのは別に不思議でもなん
でもない、先輩からしてみれば当然なのだろう。
とはいえ、

「うあ、正解です。いきなり確信突きますかね」

「お前の悩み事なんてそれくらいしかないと思ってたけどな」

うるせいほっとけ！

心の中で軽く突っ込みを入れ、仕事用の書類まとめる。
今日中にこれを済まさないと帰れない。

「俺にだって色々悩み事くらいありますよ」

「で、いつごろそんなことがあったんだ？」

「5日前くらいの事ですが・・・」

その日俺は目覚ましよりも先に目が覚めた。

（なんだ？）

最初に疑問を持ったのは不思議と冴えた頭と、氷水につかった直後のような寒気。

俺はこの感覚は知っている、幽霊が寝込みを襲ってきたのだから忘れるという作業の方が難しい。

心臓は速く、体は熱く、意識は冷たく
瞳孔が開いた

初めて俺ははつきりとした形で幽霊を見た、視界の端に銀髪の女性が探るような瞳でこちらを見つめていた。

ここまで語ったのだが先輩の反応は相変わらずクレバーだった。

「ふーん、けど前に比べたらましだな」

そういう問題でもない気がするが、俺は話を合わせておく。

「前は完璧に寝込み襲われましたからね」

「で？」

そこで先輩は話を切ってこちらに鋭い視線を投げつけた。

「それくらいじゃないよな？お前はさつき『最近』といったし、そもこの程度じゃ俺に相談すらもちこまないだろ？」

ええい、本当に鋭い。

先輩にとって目の鋭さと物事の本質を見切る鋭さは同類項なのだろうか。

「そのとおりです。それからちよくちよく寒気がして・・・特に朝とかですねえ・・・」

朝夜の境界線。

幽霊とは精神体である。

そして精神体である以上、俺たちに物理的に干渉することは出来ず、精神での干渉が精一杯なのだ。

さらに言つとその精神干渉自体も、人が精神的にも肉体的にも健全であれば侵入することすらままならない。

せいぜい相手の精神と意識の狭間でしか干渉出来ず、仮に人が意識してみようとすると霊体自体の精神が人の精神に弾かれ見えなくなる。

なら人が寝てたら無防備では？

と思うだろうが人は寝ると意識と精神が完全に自分という殻に閉じ

こもり、情報の最適化を行うのである。
その間ほぼ全ての感覚シャットアウトするため、霊体に付け入る隙を与えない。

「しかし・・・朝夜の境界線。覚醒と休眠の狭間、この瞬間こそ霊体が人に干渉する唯一の時間」

それ故に俺はこんなにも苦しまなければいけない。
こんなに苦しいのなら、こんなに辛いのなら・・・

「霊力などいらぬ！」

そんな全身全霊をこめた俺の嘆きを先輩は面倒くさそうに眺めながらポツリと呟いた。

「で？どうすんだ？」

ゆがみねえ

「とりあえずお札とか張ってみますよ、うちの曾婆ちゃんがアレだつたんでそれなりにコネ持ってるんで」

「そうかい、じゃあ一件落着だな」

「しかし嫌な予感しかしないです」

「勘か？」

「勘です」

「そうかじゃあ当たるな」

うぼあー

デスクに突っ伏す俺を片目で捕らえつつ、先輩は自分の仕事に戻っていった。

目が覚める。

俺は布団を顔まで被りながら再びきつく目を閉じた。

視ている。

誰かが。

布団越しに視線を感じる。

何か居る・・・

俺は札の効力の無力っぷりに歯噛みしつつ、口の中でもごもごもこと原稿用紙一枚分の文句を呟いて、絶望した。

（こ、怖い・・・）

得体の知れない何か俺を覗き込んでいるっただけでもうたまらない、勘弁してくれ。

人なら何とかなる、物理攻撃に物を言わせれば済む話だ。

（けど、霊体ってどうしたらいいの？）

俺は霊媒師でもなければ悟りを開いた僧でもない。

一応覚醒状態になれば干渉は早々受けないとわかっていても怖いものは怖い。

（布団からがばりと跳ね起きたら至近距離に怨み積もった女の顔・・・無理だ！怖すぎる！現状維持！）

そういつて再び目蓋に力を入れるも状況はまったく好転しない。当然である、行動しなければ進展も後退もない。

（し、ししかたない、もうやけだ！１・２・３で飛び起きる、やるぞお！）

1

2

・・・3！

布団を力の限り跳ね飛ばし、視線があつた方向に目を移す。
一気に肺に空気を送り込み、一息に氣力を練りこみ、一声により全
てを吹き飛ばそうとした・・・・・・はずだった

「う・・・・あ？」

そこには白銀の髪と赤と青を基調とした服を着た女性がたっていた。

彼女の姿を見た瞬間言葉を失った。

吸い込まれるように彼女の瞳を、顔を、全体を見て取った。

心臓が高鳴った、狂おしいほどの情熱で

頭が萎縮した、彼女以外の全てがどうでもよくなって

そして、俺は彼女の声聞いた。

（いた）

そういつて彼女は姿を消した。

何を？
何が？
何で？

あらゆる疑問符が頭の中を渦巻いたが、それを思う自分の気持ちはひどく客観的だった。
それほどまでに俺は彼女に心のあらゆるものを奪われた。

俺は何を考えるもなくベッドに突っ伏した。
ただただ体が休息を求めている。

勘は当たったのだろうか。それとも外れたのだろうか。
よくわからないまま俺の目蓋はそのまま落ち、同じく意識も落ちた。

「す、すいませんでした！」

そして俺はものの見事に遅刻した。我ながらあほ過ぎる。
直立角度45度の形で頭を下げてる俺に先輩は方眉を上げた。
二人の間に微妙な沈黙が流れる。
最初に口を開いたのは先輩だった。

「昨日言ってたアレのせいかな？」

どうやら先輩は昨日のことはよく覚えていてくれたらしい。
ほんと細かいところまで気配りができる人だ。おそらくここで俺が
『アレのせい』と一言でいってしまえば先輩は事情を察して何かし
ら主任に一言言ってくれるだろう。
理解の深い先輩を俺は心底尊敬している。
しかし、だからこそここで甘えるのは俺が許せん。

「いえ、例えそうであつても俺が遅刻した事の原因にはなりません」

先輩の瞳が鋭くなり、俺に不気味な威圧感与えてくる。
それでも俺は視線をそらすことなく見続ける。
いや、今なら全てのものを恐れず見つめれるに違いない。
昨日の出来事は俺の何かを変えたのだった。

「そうか、じゃあ主任に謝ってこい」

そういつて先輩は自分の仕事に戻っていった、口元に苦笑のような笑みを貼り付けながら。

そうして俺は出会った。

彼女に一世一代の恋を託した。

そして、彼女は来た

1話　そして彼女は来た（後書き）

どうも皆様、二次創作は初めてです。

それ以上に怖いです『特定しました^^』って書かれたら・・・
オリならともかく二次は特定されたら死ぬ以外の選択肢が見当たらない

2話 なんじゃそりゃ？（前書き）

えーりんもつと出したい
早く幻想入りたいなあ

2話 なんじゃそりゃ？

仕事の中俺はずっと彼女のことを考えていた。

枕元にたっていた幽霊に恋している。

白銀の髪に透き通った黒瑪瑙のような瞳、体からあふれる気はとも幽霊の様には見えず、生气に包まれているようだった。

（もしか彼女は生霊ではないだろうか？）

落ち着いた今でこそそう思うがこればかりは本職でもない俺にはわからない。

しかしあそこまではつきりと幽霊を見たのは初めてだ。いつもは半透明な人影で、性別と年齢くらいしかわからなかったからな。

軽く背伸びをして腰を伸ばす。デスクワークは肩と腰に来る、後尻痛い。

（つまり彼女は覚醒中である人間の精神力に、進行出来るくらいの精神生命体であるということか）

ぼんやり考える、いかに生霊でも覚醒状態の人には干涉なんて出来ない。

そもそも生きた人間に干涉できるモノ、例えば有名な心霊スポットなんかは多くの精神エネルギーの集合体である。

その不特定多数の精神体が冷やかにやってきた少数の馬鹿どもをいつせいに攻撃することにより、即効性の干涉が可能になる。

逆にこれが数多の馬鹿どもになると精神体も手がつけられない。地

力から違うのだから数を揃われたらせいぜい意識の隙間をぬって嫌がらせのゲリラ戦法しか通用しない。

しかし彼女は単体で米粒ほどの霊力しか持たない俺に対してとはいえ、干渉を行うことが出来た。

となると彼女に強い思念があるか、彼女自身にすさまじい霊力が宿っており、他者に介入することが出来るか。

（ってどんな呪術師だよ、前時代過ぎる）

そんな霊力とか精神力とか意味不明な謎エネルギーを頼るくらいならもっと他にすることあるだろう。

コップを謎エネルギーで動かすのに50年修行して体現できたとしても、物理学的に鑑みると指先ひとつで体現できる。

阿呆臭い。幽霊なんてものに逐一気を配る労力を費やすのなら、人間関係に費やしたほうがよっぽど健全적이다。

結局出た結論は、生きた人間のほうがよっぽど厄介だ、ということだろう。

アレは白昼夢と認定してさっさと忘れた方が得なのさ。

そう言い聞かせて体から競り上がる憧憬の炎を無理やり鎮火させる。ちくせう、わかっている。俺はそんな幽霊に一目ぼれしてしまった。

頭を抱える。

俺、もしかして生気吸われてる？

そのとき俯いてウンウン唸っている俺の首元に衝撃が走った。

痛い！と思う前に俺の意識が電源コードを抜いたテレビのようにぶ

つりと途切れる。

「起きろ、食事の時間だ」

先輩そういつて彼にグラップラーばりの手刀を一撃見舞わせ一人肩で風を切りながら食堂へ向かっていった。

もっとも意識が完全にブラックアウトしている俺の耳には届かぬ台詞ではあったが・・・

俺の働く会社には社員食堂なるものが存在する。

その日替わり定食は外で飯を食うより半額の値段で食べられるということでそこそこ人気だ。

何故そこそでしか人気がないのかというと、

「うげえ今日も揚げ物かよ」

そう、食堂調理の手抜きなのかしらないが圧倒的揚げ物の多さ。こつてりとしたものが多い。
その結果女性社員には不評で、よく弁当持参で屋上にたむろするのを見かける。

今は冬なのでどっか適当に場所見つけて食べてるんだろうけど。

「とりあえずAセット」

と、から揚げをチョイス。

「俺はBで」

対する先輩はカツ丼。

そういつて先輩は財布を取り出した、今日は先輩のおごりだ。
手刀で意識を刈り取られ白目を剥いた俺に対して昼飯を奢るだけ、
というのはふてえ野郎だが、仕方ない。俺は平和主義者なのさ。

トレイを片手に窓際の席は・・・残念埋まっている。
仕方ない、中央右よりの席を陣取りそこに座った。

「いただきます」

最初は味噌汁で口を湿らしから揚げに箸を伸ばす。
・・・うむ、うまい。
ただ揚げ物だけなのはいかなものか？

「さっきは何を悩んでいたんだ？」

先輩が備え付けのお新香に手をつけながら聞いてきた。
どうやら頭を抱えて唸っている俺を不思議に思っているような感じ
だった。

「俺が深く悩みこんでたらだめですか？」

そう思われるのも癪なので少しジト目で講義の声を上げた。
といいつつも俺の眼力程度では先輩をうるたえさせる事など到底出
来ない。
犬を相手ににらみ合いした方が成功率はよっぽど高いだろう・・・
やらないが。

「ああ、お前結構即決タイプだったよな。お前がそんなに悩むのは
よほどだろう？」

そんな事は・・・あるな。

なるほど、だからよく悩みが少ないと言われるのか。

一人納得したもののどう説明したらいいものか、少し考える時間をもらったためコップに入った水を一息で飲みほす。

再びコップをトレイの上に置いたとき、腹を括って全てを打ち明けようと思った。

というのも俺の体質を知っているのが先輩くらいなものだからである。

俺は今朝あったことを全て話した。

幽霊がまたもや現れたこと

その幽霊が銀髪の美女だったということ

そしてその彼女に一目ぼれをしてしまったということ

食堂で話す会話ではないなと思いながら、先輩に語った。

そして俺が忘れようとしても忘れられないということも。

それを先輩は訝しげな表情を浮かべることもなくまじめに聞いている。

なにこの人、かつこいい。

「呪われたんじゃないか？」

俺の話が終わった後、いつものように口を触れながら俺が現時点思っていたことを実に分かりやすくいった。

そりゃ誰だってそう思う、俺だってそう思うよ。
しかし・・・

「俺もそうは思っちゃいるんですがね、どうにも」

思って現実化するなら世の中どんなに幸せだろうか。
世界はハーレムで包まれるだろう。

「不毛なことだとは分かってはいるんですよ。幽霊に恋するなんて
漫画の登場人物に恋するのとなんら変わりませんからね。いや、む
しろバッドエンド用意されてる分だけ幽霊のほうがたちが悪いかも
しれませんね」

それでも・・・と俺は続ける。

あの時出来た気持ち、その思いは間違いなく俺の心から生まれたも
のだと信じている。

それだけは否定されたくない。俺はこの思いを大切にしたい。この
一世一代の憧憬にも似た恋心を。

「で？どうしたいんだ？」

先輩がそう聞いてきて俺は少しあわてた。しまった完全に自分の世
界に入り込んでしまった。

さて「どうしたいか？」か・・・どうしたいんだろうな、俺

バッドエンドしか用意されてない道に行くか行かざるか、つまりはこういう質問だ。

本来なら見えてる地雷を自ら踏みにいく必要はない。

「わかりません。ただもう一度、会うだけでいい。会いたい」

そしてそれが出来れば苦労はしない。

その地雷は見えているものの、その向こうには俺が求めてやまないものが存在する。

俺はその姿を齒軋りしながら見るしかないのだ。

だから最後に一目、そう区切りをつけたいのかもしれない。

二人の中で短くない沈黙が続く。

本当、食堂で何を話してるんだろう。

俺はこっそりため息を吐いた。

「お前シューティング好きだったっけ？」

と、先輩が突然話題を変えてきた。
なんだ？ いったい何の話だ？

「いや、好きじゃないです」

残念ながら俺はシューティングが大の苦手だ。

小学校のときギャラガやツインビーなど、ファミコン特有の高難易度を最初にやったばかりに俺の心をぼつきり折られた代物だ。残念ながらいまでもそのトラウマが俺の中にはある。

そんな俺の返事を無視して先輩は執拗にシューティングゲームを勧めた。

「東方Projectって知ってるか？」

「はあ、俺の中での東方はアジアだけです」

若干引きながら俺は答える

「そうか、知らんのか」

だから何なんだよ。

とりあえず、先輩の話を聞いて三行で答えるなら。

- ・ 音楽がいい
- ・ 綺麗且つ優秀な弹幕ゲーム
- ・ キャラもいい

の三点。とりあえずお前もやれのな。

そうだった先輩はコアなシューティングゲームだったなあ
なんかまえ生き生きと『蜂』倒したとか言っていた……蜂？

「シューティングゲームはいい。集中力がつくし、その瞬間だけだ
が何でも忘れられるぞ、色々な」

そこまで言われて俺はようやく気がついた。

先輩は彼女とは別に、より興味を持つようなもの作ったらどうだ？
と言って来ているのだ。

まあそうであつたとしても

「シューティングだけは興味は持ちませんよ」

「前貸した神威どうした？」

「埃が友達」

「しね」

ま、先輩が俺を心配してくれてるとわかっただけでも御の字か。
とりあえずシューティングも前向きに検討しよう。ありがとうござ
いますよ。

感謝の言葉を口に出すことなくかみ締めつつ、俺らはくだらない言い合いをしながら食堂を出て仕事場へと戻っていった。

その日の帰り、仕事が終わり今日は家で何食おうかなと思いを馳せていると

（ん？部屋の電気がついてる？）

アパートで一人暮らしをしている俺をいつも出迎えてくれるのは常に冷たい暗闇だった。

嫁がいればさぞかし楽だろうに、普段そう思いつつも一人の気楽さを満喫していた俺ではあったが今日に限って部屋の電気がついていた。

（友達でも勝手に入ってきたのかな？もしくは電気を消し忘れたか）

俺はそう思いながら部屋の扉を開け——固まった。

・すでに部屋には先客が居た。

いや、それは選択肢のひとつにあった。

・その先客は女性だった。

俺の母親かもしれん、今は彼女いないしな。

・その先客は見られるような銀髪をしていた。

なんじゃそりゃ？

そう、まさになんじゃそりゃ。それ以外の感情が湧いて来なかった。

今朝に見た女性の幽霊。

その彼女が今実体を持って優雅にお茶なんぞ啜っているのである。

陸地に打ち上げられた魚のように口をパクパクさせている俺に彼女が振り返る。

視線があつ。

にこり

笑いかけられた。

どばぁぁん！！！！

反射的に扉を閉めアパートの部屋の番号を確認する。

大丈夫だあっている。間違っているのは彼女のほうだ。

いや、それとも俺の頭がネジがなんか間違っていたとか？

状況を正しく認識できない。

意味不明な羅列記号が俺の頭を埋め尽くし過負荷をかけていく。

やめてくれ、俺の頭はそんなによくねーんだ！

傍から見たら気持ち悪いくらいに狼狽している俺の混乱をさらに一回りヒートアップさせたのは部屋の中に居る名も知らぬ美女だった。先ほど蝶番が壊れてしまうほど激しく閉めた扉が開き、銀髪的美女が顔を覗かせた。

一歩後ずさる俺に彼女は声をかけた。

「入らないんですか？」

綺麗な声だった。聞いただけで背筋を伸ばしてしまうような。

『女教授』そんな言葉が俺の中に瞬いた。

もしかしくなくても『痘痕も笑窪』状態。彼女の行っ全てが好意的に感じる。

うおー静まれおれー

そしてその言葉に反応することが出来ずに呆然とする俺に彼女は言葉続ける。

「立ち話もなんです。中で座ってお話しませんか？」

と、部屋に手招きする。

そこは俺の部屋・・・という突っ込みは脳内で完結し、俺は混乱の収まらぬまま自らの部屋に入ってしまった。

2話 なんじゃそりゃ？（後書き）

やべえ

ばれるビジョンしか浮かばない
人知れずこっそりやろう

3話 いい脚本家になれるぞ俺（前書き）

仕事の時間だからさっさと投稿、後主人公の名前決定でもないほうがよかったような気がする

えーりんマジ高嶺

こっからすこしずつ攻略していきます

『（相手が）攻略される』の方が好きな人はちょっとつらいかも
少なくとも永琳はがんばって落とします、他はしらね

3話 いい脚本家になれるぞ俺

家に唯一のテーブルになんとたまらない玉露の香りが漂う。

かく言う俺の前に湯飲みが置いてあるのだが、俺は手をつけずに正座のままじつとその湯飲みを眺め続けていた。

家なのに何故正座？

とか

早く飲んでしまわないと香りが飛ぶ

とか

今はそんなことミジンコの生態系と同じくらいどうでもいい。

そんなことよりこの家の家主よりゆったりと寛いでいる女性のほうが問題だ。

いや、問題ではないんだよ。

むしろ俺が今日半日『こうなればいいなあ』とか思っていたことが現実になった、実に喜ばしい。

だが考えて欲しい。

例えば一匹の犬が大空に思いを馳せていたとしよう。

その犬は鳥のように自由に飛びたかったのである。

しかしそんなことは犬には出来ないし、もっというと羽もないのにどうするの？と諦めていた。

そんなある日、いつものように縄張りを練り歩き、一定間隔で生え

ている細長い石の塔にマーキングを施してい時、突然その犬の体から羽が生えて大空へと羽ばたいたのだ―

どうよ？その犬までもでいると思うか？

俺は思わん。

突然の出来事にあわくってキャンキャン吼えるか、飛び方も分からず自然落下するのが落ちだろう。

そして俺の状況はまさしくそれだ。

突然の出来事にあわくってキョロキョロと挙動不審に視線を動かし、対応の仕方が分からず沈黙するのが精一杯。

とある小説の登場人物でキヨンという高校生が自ら宇宙人だと証する長門に対して「正直言おう。さっぱりわからない」と放った台詞は今の俺にぴったりと当てはまる。

そういえばシュチエーション的にあの状況とまったく一緒だな、実にめでたい。

こんな状況下に追い込まれた人間の最善策がすでに文章化していたなんて、心よりめでたい。

しかしリアルでやられるとこんなにテンパるとはな。キヨンお前すごいよ。

いやいや、状況をとにかく好転させないと、とりあえず教科書通りお茶飲んで褒めよう。それが一番だ。

そう思い湯飲み到手伸ばし、動きを止めた。

自分の部屋に違和感を感じたのだ。俺の部屋、こんなにきれいだったか？

そう思ったとき彼女が声を上げた。

「ああ、ごめんなさいね。この部屋少し不衛生でしたから、掃除させていただきました。ものの配置は変えてないつもりですし、なんでしたら元の状態に戻すことも可能よ?」

あれ?俺まだ何もいつてないよ?

「ふふ、不思議そうな顔ね。けどあなたの顔にかいてあるわよ?」

うん・・・うん?

あれ?これ俺が分かりやすいつて話なの?

それとも彼女の洞察力が異常つて話なの?

今度は俺の頭が幾何学模様で埋め尽くされる。若干『?』が多いのがご愛嬌。

そんな俺をくすくす笑いながらすつと体の姿勢を整えた。

その仕草に俺は少なからずときめいた。さて、俺今日でなんどくらいときめいただろう?

「では自己紹介からいきましようか。私は永遠亭、蓬萊山輝夜に仕える月の民『八意 永琳』と名乗っているわ」

そういつて柔らかい風が頬を撫でるようにふつと微笑んだ。
一瞬くらりときたが顔を引き締める。

「は、お・・・私は『槐さいかち隆治』と申します」

そしてこれが彼女との初めての会話だと気づいたのは、もう少し時間を要することになる。

彼女が部屋を出て初めて俺は足を崩した。

今首を左右に曲げるといい音になりそうな気がする。

「ふう」

緊張した。心臓がいつもの1・3倍のリズムで鼓動を刻んでいたんだろうと思う。

これは夢じゃないかと何度も自問自答したし、こっそり太ももの肉をつねったりして確かめたりもした。

今彼女は晩御飯の食材を買いに行っている。

どうしてこうなったと言われれば、俺が腹減ったからだ、というしかない。

いや、本当は外に晩飯を誘ったのだ。時間的にも彼女もそろそろ腹減る時間だし。

しかしそんな俺の提案を彼女は『のー』といった。
彼女いわく

「外の世界の食事に期待するべきところはない」

とのこと。俺らは某英国人か！

文句ひとつでも言ってやろうかと思ったら「だから自分で作る」と宣言した。

本来なら俺も付き添って荷物をもち、お金も無論俺がはらうべきだ。そう、たとえ彼女が少々奇抜な外観センスを持っていたとしても。

しかしそんな情けない事に俺はとにかく時間が欲しかった。彼女『
ハ意さん』からもらった情報を整理する時間が。

彼女との自己紹介したとき、正直彼女の話の内容はまったく分からなかった。

永遠亭？

定食屋さんか何か？

蓬萊山輝夜？

どっかで聞いたことあるなあ

月の民？
意味不

分かったのは彼女が『八意 永琳』ということだけだった。
そんな俺に対して彼女は一つ一つ丁寧に教えていった。

いわく永遠亭とは蓬莱山輝夜と呼ばれる姫が居を構える場所で、普段は病院として一般に開放されている。
そして月の民とは遠い古の時代に地上の穢れを恐れて月に移民したものの事を指すという。

彼女が言っている事を全て鵜呑みにするのなら、月から降りてきた宇宙人という事になる。
やべえ、さっきのシュミレーションは設定すらも合っていたということか。

事実は小説より奇なりだなあ。

と、ここで自分の身に起こっていることがひどく他人事のように感じたのだ。

正直に言っただけだといっても過言ではない。
だってそうだろう。あまりにも話がとっぴ過ぎる。

自分のことを月から来た宇宙人となのつたなら、それなりの証拠とやらを提示してくれなければそうそう信じようとは思わない。

「八意さん、そこまで説明してくださってありがとうございます、生憎・・・私は永遠亭や蓬莱山輝夜姫。ましてや月に人が住んでいたとは全く聞いたことも見たこともありませんが」

というわけで俺も少し探りを入れてみることにした。

こう言われれば彼女も何かしら情報を提示してくるだろう。

彼女はいつたい何のために俺の前に現れたのか、それば今のところわからない。

最初の出会いがあんな形だし、堅気ではなさそうだし、なによりいきなり俺の部屋に入り込んで『種族：月の民』を真顔で言う人物である。

・・・正直ドッキリって言われたほうが安心する様な展開だ。

収まらない混乱をよそに彼女は少し疑問に思ったように言葉を繋いだ。

「『幻想郷』というのは知らないのかしら」

「『げんそうきょう』ですか。いや、お・・・私の辞書にはそんな言葉ありませんが」

「あら、そうなの？それなりに有名になってるって聞いたんだけど」

「はあ？有名、なんですか？」

「いいえ、こっちの話よ。そうね・・・では続けて話をしましょうか」

そういつて彼女は右手を豊満な胸の位置にまでもっていき、掌を上に向けて

「っ!？」

思わずのぞけると、同時に理解した。

何故生霊姿の彼女がこの俺にも目視することができたのかを。

彼女の掌には高純度の霊力が塊となって浮いていた。

俺が50年の歳月をかけても到達しきれないと思っていた物の完成形が目の前にあった。

「これはそちらにも多少馴染みがあるでしょう」

彼女はさも当たり前のようにこういった。

確かに俺には多少だが霊力が存在するが馴染みあるかと言われれば「そんなのある分けない!」とやってやりたかった。

しかしそれ以上に、俺は今ある現実を受けとめるのに精一杯だった。そんな俺の沈黙を彼女は肯定ととり、話を続ける。

「私の現状の居場所は『幻想郷』と呼ばれるところに存在する。そこは人々が忘却の彼方へ追いやった様々な物の終着点。時には妖が、時には神が、そして時には人すらも。幻想と化した全てのものを受け入れる郷。忘れ去られた存在や技術が支配する魔境よ」

彼女は手に平にある霊力の塊の消し再び言葉を紡ぐ。

「そして私はあなた、槐 隆治を幻想郷へ誘いに来た」

そういつて、彼女は先ほど霊力を消した手をこちらに差し出した。
それは母親が小さな子を正しく教え導く手のように
それは嘆きの亡霊が黄泉へと引き摺る手のように
それはこちらを誘い込むように差し出した

「あなたの答えを聞きたいわ」

俺は反射的に彼女の手をとりたかった。

感情の赴くまま、先のことなど考えず、己の欲望に忠実に行動した
かった。

しかし俺の理性がそれをとどめ、その疑問を口にした。

「……何故、俺なんですか？」

訳がわからない。

確かに俺は霊力を持っている時点で他の人よりは違うのだろう。
しかしそれでも俺が選ばれる理由ではない。

となると本職に霊媒師をやっている人なんかどうだって話にもなる
し、徳の高そうな坊さんとかいの一番に呼ばれるべきだ。
俺の疑問に彼女は俺を覗き込むように見て、

「私の遠い昔の縁よ。そしてあなたはその血筋。あなたの魂、霊力、そして遺伝子構造にいたるまで、その類似点が多すぎるわ」

しかしそれは俺以外のものを見るように彼女は答えた。

「そして私はあなたの影を追ってここまできたの。納得できたかしら？」

ああ、納得したとも。

それと同時にひどく失望した。

そう彼女は目の前に居る『俺』には目を向けず、名も知れぬ奴の影を俺に合わせてみていただけだったのだ。

そりゃそうさ、そうじゃなきゃ彼女ほどの人が俺になんて手を差し伸べてくれるはずなんてないのさ。

なんだ、なんだ。かつこ悪いな俺。

勝手に一人で舞い上がって、勝手に一人で落ち込んで、情けない。

思わずため息が出た。

「どうかしら、そろそろ答えが出た『クー』で………？」

と同時にお腹がなった。

そういえば緊張で色々忘れかけてたが、そうだ。俺は帰りながら晩飯の献立を考えるほどにお腹がすいてたのだ。

「・・・・・・・・」

・・・ベタだ、気持ちがいくらいベタ過ぎる。いい脚本家になれるぞ俺。

先ほどのブルーな気分がふつとび変わりにきたのがレッド。ハイテンションな主人公のように俺の顔を真っ赤に染めた。

なんとも言われぬ沈黙が場を支配したが、それはふつくらとした笑い声が遮った。

上目遣いで彼女を覗くとクスクスと実に上品に笑っている。

うつ、かわいい。

なんだろう？ギャップ萌えというやつだろうか。

スラリとした性格をした彼女がコロコロ笑うとはそれだけで破壊力がすさまじい。

俺は気恥ずかしさと照れを誤魔化すために、破れかぶれに彼女を晩御飯に誘ったのだった。

そして冒頭に戻る。

さて、話をまとめようか。

彼女が言っていた幻想郷とは

- ・ 忘れ去られた人・神・妖が行き着く場所
- ・ 今はなき技術や存在がある場所
- ・ なんか魔境

・・・あれ？これ黄泉の国じゃね？

俺？死んじゃうの？

忘れられたら逝っちゃうつて・・・死ぬ以外のこと想像つかないんだけど。

とりあえずこれは保留だな。分からないことが多すぎる。

次に月の民。

月は確かアポロ11号だったかなんだかが月面に旗をさしたらしいのだが、その歴史的偉業は真実か虚言かで二つに分かれている。

月面着陸した映像は偽者だったとか、月面に到達した彼らを待ち受けていたのは月に潜む宇宙人だ、とか。

あながち嘘とは言いい切れないものがある。

確かに人類は宇宙望遠鏡や人工衛星で広い宇宙を知ることが出来たが、それでももし宇宙人とやらが存在するのならその技術力はまだまだ拙いのだろう。

（それに、実際俺が見たわけでもないしな）

本質的に俺は自分の目で見たものの信用する。

他人の話した説明や映像はその人の主観が入るため、どうしても何からのフィルターを通してでしか見る事が出来ない。

（突飛であるのは否定できないが、突飛すぎて逆に信憑性があるよな）

どこの世界に自分は宇宙人だ真顔という人物がいるのであろうか。すくなくともこの日本ではそんなこという馬鹿は鉄格子のついた病棟の一角で体育座りしてることだろう。

がちやり

そう思ったとき彼女が帰ってきた。

「今戻ったわ、さあ今日はお鍋にしましょうか」

なるほど、もし今嫁が出来たらこんな風な生活が可能ということか。素晴らしい、実に素晴らしいぞ！

しかし、なんとも早かったな。

俺の家から一番近い場所にあるスーパーといえども結構時間かかるのに。

飛んでも来たのかというくらい早かった。

しかしそんな疑問は彼女の作る鍋料理の前にはあまりに矮小、俺は彼女の鍋に思いを馳せた。

ちなみに魚介鍋だった。

幻想郷では珍しいらしい、そんなもんか？

味は・・・京の祇園に出されても違和感がないどころか、板前が土下座して「弟子にしてください」といっても俺は全然不思議には思わない程うまかった。

なるほど、悔しいがこれならば「外の世界の食事に期待するべきところはない」と言われてもしかたないだろうね。

その間何度か答えは出たかと言われたが話は保留にしておいた。

俺はまだ彼女の話を全て信用したのではない。

勿論別に鍋を食べるのに夢中だった訳ではない、あしからず。

3話 いい脚本家になれるぞ俺（後書き）

お気に入りをしてくださった皆さんへありがとう！

1話投稿してお気に入り登録0ならずさま黒歴史へ葬り去るところでした

おかげさまで逃げ場を失いました、うばあ

でもお気に入り登録してくれるとすごくうれしいです

やる気あがりますよね！

みんなあとがきで「感想よろ！」とかいうのすごくよく分かります
私ももらったらさぞかしうれしいでしょうね

でも同時にptあがりますよね

うれしいと感じると同時に悲しみを背負うなんて役得ですよ！

4話 おかしいな、話が噛み合わない（前書き）

実を言うとタイトル適当に決めました。
どんくらい適当かというと

『東方槐無夢』

どう読みますか？

はい、俺も読めません。
今のところ『かいぶむ』ってよんでる

4話 おかしいな、話が噛み合わない

「うぐう・・・」

外が騒がしい、早朝騒がしいのはスズメだけにしてくれ。

選挙活動もこんな住宅街なんかより大通り出た方がいいんじゃない？

そもそも車から選挙活動って何様？市民の事考えるのなら地に足つけて俺らの視点から物を言え馬鹿者。

カーペットの上を転がり毛布を被りなおすも、体の節々が痛い。

やはり布団が欲しい、カーペット越しとはいえ直接寝るのはつらいなあ。

つーか今何時？

んー8時30かあ

・・・・・・・・・・・・・・・・

「はっ!？」

がばりと跳ね起きる。

こんなに悠長に寝ている時間じゃない！

クラリと軽く目が霞む。低血圧はこれが辛い、頭に血が足りない。目の前を霧が張った様に白く霞む、しかしそれは一時的なもので10秒も待てば次第にそれも晴れていく。

早く仕事に……っああ？

「そうだ、今日や休みだ」

なんてお約束をやってしまったんだろう。

俺は自分の失態を誤魔化す様に軽く頭をかいた。すでに脳みそに血の通って意識もはつきりしてきたので、再び毛布に包まるという選択肢は間違っているだろう。

ふと窓の外に目を向ける、外はまだ少し騒がしい。

おそらく登校時間になった学生が騒いでいるのだろう、朝っぱらから元気だね。

ボーっとまどろみの余韻を楽しんでいると、いい香りが鼻をくすぐる。

どうやら彼女は既に起きて朝食を作ってくれてるようだ。

素晴らしい素晴らしい素晴らしい、これは実に素晴らしい素晴らしい

昨日魚介鍋を食べ終わった時、それを待ちわびたかのように彼女はこう切り出した。

「悪いけどあなたの答えを悠長に待っている時間はないの。期間は今日を含めて七日間、幻想郷に来るべきか来ざるべきかの答えをそれまでに出しておきなさい」

彼女は食べ終わった箸や皿をまとめながらやや厳しく言った。それだけ重要事項なのだろう、彼女の目は俺を捉えて離さなかった。とはいえ七日、一週間か……一週間、少ないか？

「七日間つてずいぶんと即急ですね、その日数でないといけない理由でもあるので？」

「ええ、幻想郷には管理者が存在して彼女が提示した日数がこの期間。これを過ぎる締め出されるわね。地力で帰るのは少しばかり面倒よ」

そういつて彼女は洗い物をまとめて台所へ向かった。

「今日残った鍋は明日の朝おじやにして食べましょう」と彼女が片付けの作業をしながら提案する。

ああ、実に楽しみだ。俺はそう答えてごろりと横になった。

なるほど、そういう理由か。

しかし理解は出来たが俺は到底納得できない部分が存在した。幻想郷という場所には管理者が存在し、その人物が忘れ去られた物や存在を選別するのなら、何故彼女は八意さんの行動を容認したのだろうか？

俺は別に孤高でもなければ差異者でもない。それなりに社会に溶け込み、それなりに身を置いている。

そんな存在が忘れ去られた幻想の居場所に行くだって？前提条件からして間違っではないだろうか？

それとも何か、俺が話したところで与太話として処理してしまう気か？

くそ、『管理者』そんな存在がいなければ俺も疑問なんて持たなかったことだろうに。

ガリガリと頭をかく。

しかも驚きなのが俺に一週間とは言え猶予を与えていることだ。

ただ彼女が何かしら駒を欲しがるだけなら簡単だ、攫えばいい。

連れ去る場所は比喻でもなんでもなく、正しく忘れ去られた郷だ。

絶対に見つかることのない場所だといえる。

俺がいたという証明も月日と共の剥離し、微分化していき、最後には消えるのだろう。今回の様に猶予を与えるよりそっちの方がほとんど機密性を高めている。

そうして俺もめでたく幻想と化す、めでたしめでたくなし。

しかし件の管理者は俺に猶予を与え、選択肢まで用意している。

問答無用で攫うことと比べれば破格の待遇、いやもはやそんなレベルではない。これは変革といっていい。

幻想という郷の変革、異様にきな臭い。

さらに言うなら八意さんが嘘を言っている可能性。

俺をどこぞに身売りしてやろうと考えるなら実に都合がいい。

一週間という期間に自らの近辺を整理整頓してくれるのだ、後始末が実に楽だ。

厄介だ、非常に。

どう転んでも俺に厄介ごとしか降りかからない気がしない。

面倒なのか？そうか、じゃあもう答えが出てるんじゃないのか？と自問自答する。

もちろんだとも、断ればいい。簡単じゃあないか。

だが俺はかちやかちやと軽い音を立てて洗物をする彼女の横顔を見つめる。

月光のように澄んだ白銀の長髪に、それを同化したかのように写る白陶器のような肌。

すらりと美曲線を伸びる鼻先とふっくらとした唇、そして彼女の瞳は横顔から見ても吸い込まれそうに大きく、美しかった。

そうだとも、厄介ごとが来るなんて彼女が来た時点で分かっているし、それで納得出来るのなら俺もこんなに迷ってない。

ああくそ、この自問もいったい何回したことが。いい加減はつきりしろ、いつもの俺じゃないぞ、俺！

ごろごろと悶絶する。

満腹に食べ終わったばかりで膨れ上がった胃は抗議の声はあげるも全て無視する。あーうーどうするよ俺え・・・

と、そこではたりととても重要な事項に気づいた。

「そついえば八意さんは期限来るまでどうなさるんですか？一旦幻想某に戻るの？」

「いえ、その予定はないわね。二度手間だし面倒なもの。七日の間は適当にこの場にとどまるわ」

鍋で使った皿を謎の技術で半瞬かけず汚れを消し飛ばしながら、彼女は淀みなく答えこちらに目を向けた。

「嫌なら私はどこか宿でも取るけど・・・」

全力で拒否した、それはもう体全体を使って。

そうして俺は同じ部屋で一夜を共にしたのだった。
俺が床のカーペット、八意さんは俺のベッドで。

別に何かしら如何わしいイベントはなかった。
まあ当然ではある。

しかし今日から後六日間とはいえ八意さんと同居できるのだ。
鼻歌でも歌いたい気分だな。

と、その時俺の携帯電話がけたたましく鳴り響いた。

『刑部 先輩』

あれ？先輩からだ。

今日は先輩は仕事じゃなかったわけ？と疑問に思いながら携帯に手にとり通話ボタンを押した。

「はいもしもし、槐ですが」

『ああ、今起きたか？』

「いや、大丈夫です。それでなんすか、先輩今日仕事ですよね？」

『ああ、いや・・・そうだな』

先輩にしてはいやに歯切れの悪い言い方だった。

今頃携帯片手に唇を撫でていることだろう、実に分かりやすいなあ手に取るようだ。

そんな上機嫌且つ余裕綽々な俺に先輩は突然冷水をぶっ掛けてきた。

『もしかするとだが、八意 永琳って女性がお前のところに来なかったか？』

.....

数秒、俺の思考はショートした。

数々の疑問が振って湧いてきて収拾がつかない。

いかん、だんまりはまずい！何か話さなければ！

俺は手当たり次第に湧いてくる疑問の一つを手に取り投げつけた。

しかしその疑問は非常に全うでありながら、今言っではいけない疑問ワースト一位だったと、後で気づいたのだった。

「なんで先輩が知ってんですかぁ！！！」

その俺の叫びに先輩はため息と共に答えた、やはりお前か・・・と。疑問符が頭の周りをくるくる回っている俺に先輩はこういった。

「テレビでも見てみる、あーチャンネル8だ」

その台詞に迷わずテレビのリモコンに手を伸ばす。

そして見た。

今台所に立っている八意さんが買い物袋を片手に、何も付けず大空へと飛んでいく映像をー。

「や、やごころさぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！」

先輩の事も忘れて大声で叫んだ。電話越しに何か叫んでいるが、もう知るか！

今の俺はこれ異常なくらいに混乱している、というか最近混乱してばかりだな俺は！

とにかく俺は混乱をどうにかして欲しかった

納得する理由が欲しかった

解決するべく答えが欲しかった

だからこそこの混乱の大元凶である八意さんに駆け寄った。
今の俺にはそれしか考えられない。

「や、八意さん！て、てててれびい！」

声が異様に震えるが俺は一切気にかけない。

冷静な自分が「なに言葉を囁んでるいるんだ」と失笑する。

しかし今は気にかかる事項がでか過ぎてもう何がなんだか分からない。

そんな小さなことには目移らないのだ。

うおー

そんな俺を彼女は『？』で答え、今しがた見ていたテレビの画像に視線を移し、

「あれが？どうしたの？」

とおっしやられた。わふー、くーるびゅーていー

「いや、どうしたもこうしたも！何飛んでるんですか！っーか飛べたんですか！？」

あれ？おかしいな、話が噛み合わない。

そもそもおかしいのは彼女か？俺の方がおかしいのか？俺ら人間は何にもなしに空を飛べたか？

・・・・・・・・・・・・・・・・うん飛べない。

じゃあ、おかしいのは彼女だ。そうだそうに違いない。

「おかしいですよ！やごころさん！」

再び部屋に俺の絶叫が響き渡った。

「靈力で空を飛ぶのが普通ではないの？だったらどうやって地上の民は月へ到達出来たのかしら？」

「純粋科学力で宇宙へ昇ったんですよ。そもそも靈力なんてここでは稀有な代物なんです。俺ですら珍獣扱いされるんですから」

「え？そんな！地上の民は結局靈力と科学の融合がないまま成長したの！？・・・・・・・・なんて、原始的な」

まずそこからか、彼女はあまり俺たちが住む世界に興味なかったのかもしれない。

となるともし俺が幻想郷に行つたと仮定したら、あつちの常識に馴染めるのかという問題だ。

霊力で空を飛ぶ事が常識の世界だと考えると他にはどんなものが常識だろうか？

幽霊に絡まれて世間話するのが常識とか？

それとも死んだ人間が生き返るのが常識とか？

・・・どちらにせよ、あまりこちらの常識に捉われてはいけないな、まだ行かつて決まっていけないけど。

その間、八意さんは驚きの声を上げた後「・・・そうか穢れが・・・」とか「・・・」だからこれほど時間を・・・」と呟いていたが、俺はふと別の懸案にぶつかった。

何故先輩はピンポイントで彼女の名前を言い当てたのだろうか？

部屋の隅に転がった携帯を眺めながら俺はそう考えた。

八意さんと朝食を取った後、俺はノートパソコンを開けてネット回線を繋げる。

ちなみに八意さんは俺の部屋においてある小説を手にとって読んでいる。

速読というのだろうか、司馬某作の分厚い本で、一ページに細かい

文字が2行にわたって出来たものなのだが、ほんの10秒ほどで次から次へとめくって行く。

いや、幻想郷ではこれが常識なのかも・・・と自分を納得させパソコンでニュース項目を開けた。

『スーパーマーケットに飛来するする女性！？』

市のスーパーマーケットで、夕飯の食材を求めにやってきた主婦のなかに、空中を浮遊して来た女性が、買い物をして再び浮遊して帰宅するという事態が起きていたことが明らかになった。

一部始終を撮影していた一人がウェブサイトに掲載、そのコメントのなかで「空から降りてくる少女^{シート}を探すために空を見上げたことはあるが、実際に起きるとは想像もしていなかった。幻想郷は幻じゃないんだ！」と述べている。

19日午後6時15分ごろ、スーパーマーケットのもっともピークに達した時、一切の飛行器具らしきものを持たず、買い物袋片手に東方Projectの登場人物の1人『八意 永琳』と思しき人物が、空中を文字通り滑空して訪れた。

その場に居た100名近くが絶句する中、八意 永琳と思しき人物は魚介類や葱、白菜などを買い込んで、再び夜の闇に消えていった。

東方Projectとは、同人サークル『上海アリス幻楽団』の作品群の総称であり、主にZUN氏一人が制作している「弹幕系シューティング」を主軸としている。

ニコニコ動画という情報媒体を主軸に、巷でささやかながら急速に広まったゲームの一つであり、八意 永琳と呼ばれるキャラクターはそのシリーズの一つに登場するボスの内の一人である。

何故この場所に現れたかは、完全に不明となっており、製作者のZ

UNも口を噤んでいる。』

東方Project・・・

シューティング好きの先輩がやたら押していたゲームだったか、なるほど道理ではれる訳だ。

昨日に見た幽霊の話を逐一先輩に報告したからばかりだったかな、もしかしたら先輩は八意さんのことを知って進めたのかも・・・いやそうだろう、あの先輩だからなあ。

試しに幻想郷で調べてみたらwikiが頻繁に更新されるほどに知名度は高いらしい。

調べてみると、なるほど・・・わからん。

冥界、妖精、吸血鬼に閻魔。

確かにそれは幻想だろう、昔の文献に載っているだけで今の現代社会は居るとは真に受けないだろう。

というか昔の話でも『いた』と真に受けるやつなんて居ないだろう。

ちらりと外を見ると、相変わらず騒がしい。

後で改めて外を見たら、騒がしいのは登校中の学生ではなく、多くのいい大人がカメラやビデオを片手に、犬のように走り回っているのだった。

中にはプロも混じっているのだから笑えない。

ごついアンテナつけたワゴンが牛歩のスピードで走っていて、しかも中の人間は全てのものが不自然に見えるのか、一箇所に視線を写すということをしてない。

確かにここは住宅街で車の往来はほぼないが、一言やめてくれといいたい。

俺はため息を一つもらしてパソコンの電源を切った。

調べた所、幻想郷の管理者は『八雲 紫』という妖怪らしい。

妖怪って・・・なんだよ、とも思ったがそういうものなんだから仕方ないんだろう、俺にはさっぱり理解できないが。

俺はごろんと横になる・・・・あれ？頭に枕が置いてある、こんなところに置いたっけ？

ちらりと八意さんに目を向ける。

目が合った。

笑いかけられた。

視線を外した。

ゴホンッ！

この八雲はいつたい八意さんをどうするつもりだろうか？

たしかに八意さんは大きく行動をとってその存在を世に知らしめた。それは幻想郷の理に反するはず、だがその一方で東方Projectという幻想郷ほぼ同系列の話を容認している。

つまりこれは同列とは言え本質が違ったため放置したか、もしくはその行為そのものが幻想郷に利する事ゆえに容認したかのどちらか、か。

前者だった場合どうなるか？

本質は違えどその根本にあるのは『秘匿』だ。

『これほどしか情報の相違が激しいのなら大丈夫』というのは逆に

言っと『一部分とはいえ相違が合致したら拙い』ということにならないか？

そうなるのと八意さんは非常に苦しい立場になる。相違が激しかろうと、類似するものがあり、それを証明する存在があるなら幻想は幻想でなくなる。

つまり幻想郷の崩壊、それを管理者が許す？許さないだろう。

いや、それ以前に何とかしてこの状況下に火消し行為を行うはずだ。俺ならそうだな、さっさと八意さんを始末して情報の風化を待つのがベターだろう。

昔妖怪が本当に存在していたのなら、今の現状を鑑みたら分かる。彼らはいつぞや存在しないものとして扱われたのだからな。

では後者ならどうか？

東方Projectという同系列の話が広がって幻想郷が得する点とは一体なんだ？

もっとも可能性が高いのは神や妖怪の為に行われているという事だろう。

神や妖怪は人々の信仰なくして存在できないと書かれていた。

神は畏怖や尊敬を糧に、妖怪は恐怖や憎悪を糧に。

人に想われるというのはそれほど重く大切なものなのだ。

人に慕われ神になる、釈迦やキリストの様に。

人に疎まれて妖魔に落ちる、吸血鬼や鬼の様に。

そしてこの東方Projectはそれらの想いを増幅するための神輿として使われたのでは？

そこまで考えて俺は軽く頭をかいだ。

確かに東方Projectは幻想郷の謎を紐解く優秀な資料だが、

あくまでこれはゲームであり現実ではない。

恐らく前者としても後者としても肝心な部分は隠されている可能性の方が高い。

それなら・・・と俺は視線を八意さんに向けた。

（直接聞こうじゃないか、なんせ彼女はデジタルな情報体ではなく、現実に存在する人物だからな）

そして俺と八意さんは、その日一日を幻想郷の話に終始した。

ところで明日の仕事はどういう顔でいけばいいか、誰か教えてくれ。

4話 おかしいな、話が噛み合わない（後書き）

初めて感想もらいました、ひゃっほーい

p tがまたあがったよ！やったねジラちゃん！

・
・
・
・
・
・
・

身内にばれたらバイツァ・ダスト！

いいや限界だ！押すね！

5話　なんか腹立ってきた（前書き）

ようやく説明臭い文章からおさらばだ！
なによりえーりん書いて癒されるぜ！

5話　なんか腹立ってきた

カタカタカタ・・・

「八意　永」 「検索」

「何を検索しているのかしら？」

「!？」

「あら？私に興味をもってくれたの？うれしいわね・・・でも」

カチカチカチ

「八」 「検索」

「女の秘密に無断で覗くのはマナー違反だと思うわ」

「・・・はい、すいません」

結局八意さんって何なんだ？

「さて・・・」

たった一日休んだだけで久しぶりに会社を見上げたような気がする。

5段ほど続く階段の向こうに2箇所ある自動ドアと、緊急事態が起きたら一番に心臓発作を起こしそうな老警備員が両脇を固めている。前から思っていたが、あの警備員何か意味があるのだろうか？人件費削減といっても、これはいかなものか。

・・・まあ皆文句は言わない。誰だって地方に転勤なんてしたくないだろう。結局はしがないサラリーマンなのさ。

さて、それよりも当面の問題は

「まじ先輩になんて説明しよう」

苦虫を噛み潰したような渋い顔を作って、気力なく階段を上る。なんで俺あんな返答したんだろう・・・

しかも折り返しの電話も結局しなかったしな、怒ってるだろうなあ。

頭をガシガシとかき乱す。いや、それだけならいいんだ別に、それ
だけなら俺もここまで悩みはしない。

先輩がいかに厳しいとはいえど、分別を持った立派な大人であり模
範だ、話していい話と悪い話の区別はしっかりしている。

早々に他言することがない上に、謝って事情を説明したら済む話で
ある。

さすが先輩、かつこいい。ただ目つきの悪さが残念。

しかし、

「おい、今度の休みに　にっこうぜ」

「なんだよ、あのニユース興味あんのかよ」

「それもあるけど、目撃者情報募集してるらしいんだ。有用な情報
だと金一封でるらしい」

「マジか！・・・いや、まあそうだよな。この現代社会で魔法が存
在するかもって言うんだからなあ、聞いた話だとイギリスもその話
にお熱なんだと」

「あそこはポッター発祥の地だからな。そういうファンタジー的な
ものに飢えてんだろ」

「はあ！？藤岡あのやろっ、この時期に有給とりやがったのかよ！」

「『俺の嫁を迎えに行くんです！』っていつて人事にこり押してた

な。後で見たけど左遷リストにそいつの名前新しく入ってたよ」

「馬鹿じゃねえの？」

「ちなみに俺も明日有給とった、嫁が俺を待っている」

「おいしい！」

これだ。これなのだ。どこ歩いてもどこ見てもその話題で持ちきりだ。

今朝のニュースで見た話だけど、昨日の昼ごろ、魔法を求めた中学生が集団で学校を抜け出したんだと。やめろ、これ以上俺をネガティブな気分にはさせるな。

インテリ学者最強の呪文『集団催眠説』にも期待したのだが、目撃者があまりにも多すぎてそいつらも肯定しだす始末、勘弁してくれ。もし俺が幻想郷とやらの誘われていることがばれたら？想像したくないね！

先輩経由はほばないと信じたい。それじゃなくともでも誰かが『八意さんが俺のマンションに入っていくのを見た』なんて言い出したら・・・

「おはようございます」

「おはようございます」

俺は受け付け嬢に軽く挨拶をしてタイムカードを切りに関係者用の扉を開けた。

うぐい、今日一日俺の胃腸に幸あらんことを。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

そして開幕1秒で諦めた。無理だ今日から俺は胃腸薬常用者決定だ。関係者用通路には鋭い瞳、なのだがあまりに鋭すぎてもはや線になつてる先輩が壁にもたれ掛かり、俺の到着をまっていたようだった。思わず背筋を伸ばすように仰け反り、一步引いてしまう。口元がなんかもう色々な感情が混ぜあわり、不気味に引き付く笑みを浮かべてしまっている。

「・・・・・・・・・・よう」

最初に口を開けたのは先輩だったが、俺は先輩の背後に雌伏す猛獣の影を幻想して返事することが出来ない。

ひたすらに不気味な笑みを浮かべている俺をスルーしつつ、腕時計を確認しつつ口を開いた。

「タイムカードの時間、大丈夫か？」

その一言で俺は覚醒した。

まずい、一応余裕を持つて家を出たが周囲の話に気をとられ、いつもより進行のペースが遅かった。

「あ、はい。すみません押して来ます！」

俺は慌ててタイムカードを切りに先輩の横を通り過ぎようとして、肩をつかまれ

「今日は購買で飯買って屋上で食うぞ」

と言って肩を切って自分の仕事場へと足を向かわせた。
一方俺は青い顔をしながら俯き加減に立ちつくすしかなかった、もう既に胃が限界だ・・・

もうすぐ聖夜は近い。

女たちはその日に向けて自身を磨き、男どもはその日に向けてお金を貯める。

各社企業はビッグイベントに便乗して様々な企画を立ち上げ、少しでも多くの実績という名の金を欲している。

企業という組織から、社員という個人まで聖夜というイベントに振り回されているのだ。

そして話題の中心は常に聖夜がその場所に居座って、その毎年の現

象は変わらないと思っていた。

それが今変わった。・・・いや正式に言うならば昨日だろうか。

街頭映像が飛空する女性を流し、画面が切り替わると魔法というものが存在するかしらないかなんて、普段から考えればこいつら全員頭のネジが緩んでいるとしか思えない議論を繰り返している。

しかしそれを眺める遊歩道の歩行者はまじめな顔して、だというのに期待に満ち溢れた表情で街頭映像に目を向けている。

それはサラリーマン風の男性だったり、子供を引き連れた一児の母だったり、ジャンクフードを片手に歩く学生だったり、中にはやや肥満型ともいえるリュックを提げた野郎共の集団は鼻息を荒くしていたりもしながらそれを見ている。

そしてそれは俺の働いている会社の中でも変わらない。

一昨日まで爪の手入れに勤しんでいた斜め前に座る2つ年上の笹原さんも、すり鉢といわれヒラの社員から忌み嫌われていた長山係長も、俺の隣座る同僚の上野も皆が皆、魔法の有無について協議を繰り返している。

その顔は初めてサンタクロースを見た子供のように、瞳を輝かせ、時には顔を紅潮させ語り合っているのだ。

その一方俺は顔を青くして頭を覆っていた。

（ぐうおおお、なんじゃこりゃあ！なんで皆こんな事まじめに協議してるんだあ！）

俺が最初に思った事は意外にみんな『東方Project』について知っているということだ。

さらに言うなら隣に座る上野は「えーりん！えーりん！」とか「おま・・・その情報 k w s k !」とかなんかよく分からん日本語を使っている・・・ k w s k ?

いつも堅苦しいなまでに真面目で無愛想な奴がこんな事言っている。つかお前は八意さんの事好きなのか？

「ああ！？おいよつく聞けよ槐い。俺はなあ東方Projectも、えーりんも、咲夜さんも、超・大・好き・だあ　　っ！愛していると言ってもいいね！」

「あ、ああ。そう……」

「つかー何？その『八意さん』って？東方厨なら『えーりん』だろがあ！」

といいながら右手を全力で振り始めた。

何だこいつ。というか、いきなり人の名前を言うのか？本人の目の前で？許可もなく？

無理だ、俺は絶対に・・・そもそもこいつも本人目の前にしたらいきなり名前言うのだろうか？

．．．．．いいそうだ。なんか腹立ってきた。

今度名前ですんでいいか聞いてみよう。

「おいお前ら、仕事しろ」

その時、歪みないいつもの先輩が瞳を刃の様に鋭くさせて皆をにら

みつけた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

まさに鶴の一声だった。

和気藹々とした仕事場が半瞬にして静まり、残ったのはカタカタと言っキーボードを叩く音だけが響き渡る。

まさに圧巻、下には強いすり鉢係長も一所懸命仕事をしている・・・ふりだと思う。

かく言う俺も背筋を伸ばし気を引き締めて仕事に入る。・・・尻が痛い。

「槐、飯食っぞ」

誤魔化せないかところり食堂へ向かおうとしていた俺を先輩が襟首を掴んで押しとどめた。

いや、まあ分かつてはいたけど。俺はドナドナを脳内再生しつつ先輩に連れられ屋上へと向かっていった。

ある晴れた 昼さがり 屋上へ 続く道
先輩が ずるずる 俺を 引き摺りゆく
かわいい俺 引き摺られて行くよ
虚しいなひとみで 見ているよ
ドナ ドナ ドナ ドナ 俺を 引っ張り
ドナ ドナ ドナ ドナ 俺の頭が ゆれる

「そろそろ自分で歩けよ」

「・・・はい」

5話　なんか腹立ってきた（後書き）

大量のタグを見ていいなあと思う

反面、永琳好きな人以外余分に来て欲しくないから現状で満足

さらに言つと俺の駄文が多くの人に见られないから一安s（ry

という訳で仕事行くので短いです、では

6話 いこう、幻想郷へ（前書き）

先輩との会話は基本的に時間かかるなあ
そんなわけでいつもの2倍かかりました

6話 いこう、幻想郷へ

屋上に出ると吐く息が白く色づき、本格的な冬の到来を感じさせる。聖夜までの後3日を数えるだけだが、今だ雪がちらつくことはあっても積もることはない。

もう少し北陸にいけば違うんだろうけど、そう思っながらホットの缶コーヒーを片手に身を竦ませた。

俺たち以外の人影は見えない、見えるはずもない。確かに暖房の効いた仕事場は少々頭がボーッとするものの、こんな寒空で昼食を食べる馬鹿は居わけないよね。

「・・・・・・・・」

そんな馬鹿が今現在二人屋上で缶コーヒーとサンドイッチを片手に黄昏ている。

いやもつとも今から話す事は馬鹿みたいな場所だからこそ話せるものがあるが。

俺はコーヒーを一口啜り口を開いた。

「先輩東方Projectってご存知でしたよね」

まあ今話題にもなってますけどね、と俺は続けた。

その間先輩は何か口を挟むことなどせず、かといって急かすような雰囲気もせずビルの下を走る車の影に目をやっていた。

「もしかしてですが、俺の見た幽霊の人物が八意さんに似ているって想像ついてました？」

「まあな。長髪銀髪赤青服装なんて俺は八意永琳くらいしかしらん」

その時先輩が始めて口を開き俺の話を肯定し、ペリペリとサンドイッチの袋を開封してぱくりと口に放り込んだ。

「しかしお前から話を聞いたその日に、んなことあったなんて想像すらつかなかったよ」

「違いはないですね、特に俺なんか元ネタしらなかったからそうとう混乱したんですよ」

俺も先輩と同じくサンドイッチを開封して一口、シーザードレッシングを主軸にレタスとハムの香りがふわりと広がった。定番ながらうまいなこいつは、個人的にはスライストマトも一切れ入れて欲しいが。

一時俺と先輩との間にものを咀嚼する音だけが響きわたった。俺は口の中のサンドイッチをコーヒーで流し込み話を続けた。

「実は八意さんに幻想郷へ来ないかと誘われまして」

この言葉に先輩は初めて反応らしい反応を見せた。缶コーヒーを傾

ける動作が一瞬とまり、再び動き出すという蚊がとまった程度の小さな変化ではあったが。

それに構わず俺は続ける。ここから俺がもっとも話したい、相談してみたい事だったからだ。

「後5日間までに俺はここに留まるか幻想郷へ行くかを決めなければならぬんです。しかし・・・」

全て話そう。残念ながら俺は頭の回転はいいほうではない。

自分で見たもの聞いたもの信用するというものの場合によりけり、時としてそれが逆に自分という視点のフィルターしか見てないと言うことになりかねない。

それは『独りよがり』ともいえる。たまに面接とかで「自分のことを客観的に見ることができます」なんていうのははつきり言おう、馬鹿だ・・・そうだろう？昔の俺よ。

「自分のこと」というのは置き換えれば自分しか見てないということになる。

本当に客観性がある奴なら多くの人と情報を共有して、そしてそれを独自で纏め上げる技術をもつ。これこそが本当に客観的視野で見ることが出来る人物。

だから今回唯一情報を共有している先輩に全てを話し情報の比較を図りたい、俺は聖徳太子や諸葛孔明ではないのだ。

正確な情報を整理するのならば他者の情報との比較すれば容易く、さらに先輩は素晴らしいことに大人の良識と寛大さを兼ね備えつつ、先を見据える慧眼ももっているパーフェクト超人。

俺なんかに及びもよらない決案を出してくれるだろう。

「・・・という訳です。幻想郷は本来隠蔽し、幻想たるもの。しかし今回はどう考えてもおかしい。その上ではたして行っていいかどうか・・・」

皆『幻想郷が実在するかもしれない』という懸案に夢中になって他のことには目を向けていない。

確かにもし俺が当事者ではなかったらこんな事考える気すら起きなかった。

ただその他大勢に紛れて真面目な顔で魔法の有無について話すのだろうか？

何故今まで表沙汰にされてなかったものが何故今になって露になったなんて考えただろうか？

そして、映像にうつる八意さんに俺はやはり心ときめかせていたのだろうか？

そこまで考えて俺は軽く首を振り、頭をかいた。

馬鹿らしい、今はifについて考える必要なんてない。

「・・・俺から言わせれば問題はそこではない」

そう答えた先輩に俺は視線を移す。

先輩はいつものモーションを取り、すっかり冷めたであろうコーヒを一息で飲みきった。

「問題は何故お前か、だ。そしてもう一つは、何故幻想郷を示唆する行動をとったにも関わらず八雲紫が動かないのか、もしかすると

だがこの事態を含めて既に決定事項なのかもしれん」

前者の疑問にはすぐ答えられる。俺の先祖に友好関係があったらしくて、だったか。

しかし後者は正直先輩がいったい何をいつているのか分からなかった。

「ちょ、どういうことですか！つまり八雲紫という人物は八意さんを利用してこんな自体を！？」

「そうかもしれんという話だ、さらに言うならば俺の知識にある八雲紫と八意永琳が本物ならこんな初歩的なミスはしないと思う。設定は確か『妖怪の賢者』と『月の頭脳』頭が切れるとかいう次元の話じゃない。その存在がこの事態を容認しているということは、この状況そのものが幻想郷に被るデメリットを差し引いても行わなければならない、その必要がある訳だ」

先輩はそう答え俺に向き直った。

「それがどういったものなのか、情報が少なすぎる今は分からないが幻想郷がこのまま干渉を続けるようならば、お前が幻想郷へ行こうが行くまいがこの世界は変わっていくだろう」

それはそうだろう、この世の中は大きく変わるに違いない。霊力とか魔力とかいう謎エネルギー、それは単純にこの現代社会が

もつとも危機感を募らしているエネルギー問題の解消の主軸として扱われる。

なんせ霊力とは、加工しだいで一切の飛行機器を持たずしてリアル空中散歩を可能にするのだ。

霊力1に対するエネルギー変換効率はどういうものかまで突き詰められるのであれば、八意さんが呟いていた霊力と科学の融合が可能になるのではないだろうか。

そうなれば、全世界で新エネルギー革命が起こるだろう。この東方の島国を震源地として。

「お前にあるのは視点の違いだけさ。幻想郷へ旅立ち俺たちの世界が変わるのを傍観するか、ここに留まり変化という濁流に飲まれ流されるかはな」

先輩はそういつて俺に選択肢を投げかけた。
幻想郷へいくか、留まるかを・・・しかし、

「この変化に干渉するっていう選択肢はないんですか？」

俺がただ時代の流れに流される言い方が癪に障る、断固抗議だ。
しかし先輩は俺の抗議を面白そうに鼻で笑った。

「お前が、か？無理だな、到底敵わん。例えばもし、今年正月のK-1で魔裟斗悲願の復帰戦があったとしてその挑戦者がゾウリムシ

だ。どっちが勝つと思う？そういうレベルの話だ」

そこまでいうか！？つか俺ゾウリムシかよ！

その言葉に俺はふて腐れたようにそっぽを向いて、残りのサンドイッチを口の中に放り込んでコーヒーで流し込んだ。

先輩は俺を見ながら何が面白いのやらニヤニヤ笑っていたが、ふつとため息を一つついて再び口を開いた。

「誇張でもなんでもない。本当にお前の間にはそれくらいの差がある。納得したいのであれば、お前が幻想郷へ行って答えを見つけるんだな、案外八雲紫はこちらと幻想郷を繋ぐ外務官としての役割でお前の幻想郷入りを容認したのかもしれないな」

先輩は空のコーヒーの缶を弄びながら、今俺がもっとも心が動くであろう言葉を言い放った。

「それに、八意永琳のことがわすれらるのか？」

「……………忘れられる訳がない

その言葉は反則だ、卑怯だ、意地悪だ

先輩の一言でもう答えが決まってしまった。

たぶん、俺には面倒くさいことが巻き起こるのだろう。

幻想郷と俺たちの世界を繋ぐパイプとして俺は使われるのだろうか？
それとも幻想郷宣伝の為のスピーカーとして俺は使われるのだろうか？

はたまたなんてことはない、ただの駒として俺は使われるのだろうか？

上等だ、やってやろうじゃないか。恐らくこのチャンスを逃したら次はない。

降りかかる火の粉を払いながらも俺は進んで行つてやる。

たとえ八意さんは誰かの影を俺と重ね合わせてたとしても、それでも構わない。

そもそも出会いとは、そんなものじゃないか？

昔初恋の人に似ていたから、とか。

趣味が俺と同じだっただけ、とか。

最初はその程度でいい、問題はその過程。

俺はやる、やってみせる。

彼女のそばに並び立つために、なんだってやってみせよう。

もう迷いは消えた。いこう、幻想郷に

先輩は俺の表情を見ながらにやりと笑った。

「ま、がんばんな」

「そついえば八意永琳は今何してるんだ？」

冷たくなつた缶をゴミ箱に投げ込んで先輩は聞いてきた。

俺も続けてゴミ箱に向かつて投げ込んで、外れた。

くそっ、と悪態をつきながらのろのろゴミ箱へ近づいて缶を拾い上げてその中にぶち込む。

「とりあえず目立たないようにしてくださいって釘さしてますので家に籠ってるかと思いますが」

俺の返答に先輩は一瞬言葉を詰まらせた。

不審に思つて振り返つて即後悔した。その鋭い瞳が俺の刺し貫いて
いるからだ・・・な、なんなんだ！？

先輩は俺を視線から外さず、外の凍えるような空気にも負けないような声を上げた。

「家って、お前のか？ってことは、泊ったのか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・あ

一陣の風が屋上を撫ぜる。

俺が思わず身を震わせたのはその故だと信じたい。

ゆっくりと後ずさる俺に合わせるように先輩が歩みを進めていく。

「知ってるか？俺はな、13日の金曜日にジェイソンがくそつたれなカップル共に正義の鉄槌を下すシーンが大好きなんだ」

「ちょ、ちょちょっと待ってください！八意さんとはそんな関係じゃないですって！そもそも八意さんは俺の影を追って・・・・・・・・」

俺の引きつった声に先輩は意を解さず、すばやく踏み込んで俺の頭を鷲掴みにした・・・・いてえ！！

「能書きは垂れたか？じゃあクタバレ」

「あ、あががあああががあああああああ！！！！！！！！！！」

刑部先輩26歳

スペック：S+

今まで付き合った彼女：2人

付き合った期間最長：3ヶ月

振られた理由：なんでいつも怒ってるの？ 怒ってない

モテない理由：目つき・よく不良に絡まれるから

仕事帰り、家へと歩みを進める中、俺は思考の底を漂っていた。

なんせ幻想郷へ行くという決心はついたものの、やるべきことは山
積みだ。

まず会社は、まあ退職しなきゃ駄目だよな？

この時期このご時勢に退職か、いてえなあ・・・

ガリガリと頭をかいて今やらなきゃならない身の回りの整理に頭を
悩ませる。

とりあえず後五日間で全てのことに決着をつけなければならない。
まず

- ・会社の退職願

- ・アパートの明け渡し

- ・親に事情説明

これは確定だ。

会社の退職は色々引き継ぎとかあるし、つーか聖夜前のこの時期だし。

もしかしたら聖夜までは仕事はしないといけないかもなあ。とりあえず辞職届は書いとして、次はアパートの明け渡し。

不動産屋に解約の連絡して手続き。

その後に荷物を出して、冷蔵庫とか洗濯機とかどうしよう。処分しようと思ったら以外に金かかるからな。

最後は親だな。

ま、俺の家は放任主義だからそれほど強くは言われまい。

むしろ女性のために全てをなげうった言ったら、逆に喜ばれそうだ。変態だからなあ俺の家は。

後は貯金全てを家に渡したらいいだろう。

後はそうだな、幻想郷に何を持っていこうかな？

電気通ってるのか？

電波は？水道は？

うーんネットで調べたいところだけど、八意さんが許してくれるかな。

そこで思考の渦から身をあげた。

いい香りがする。今日はなんだろう？これは恐らく・・・ビーフストロガノフ！だと思う！

いいねえいいねえ最高だね！

俺は期待で膨張した心を胸に家の扉を空けた。

6話 いこう、幻想郷へ（後書き）

俺キモス

そういえば最近気付いたけど感想もらったくらいではpt上がらないですね

素晴らしい！素晴らしい！これは本当に素晴らしい！

これで心置きなく「感想くれ！」って言えmas・・・

7話 何で俺はこんなに阿呆なんだ（前書き）

年内には幻想入りしたい

つーか二週続けて先輩話にするところだった

あとで読み直して（誰得？）とか思わなかったらえーりんまた出な
かったは

慌てて消した、そしたらこんな時間かった、サマソ

7話 何で俺はこんなに阿呆なんだ

深呼吸を一つ、気合を入れて覚悟をきめる。

これを提出したら後戻りは出来ない、全ては一からのスタートとなる。

それでいい、しがらみを残して前に進めるか？

「主任、すいません。お話があります」

頃合やよし。さて、奇妙で不思議な一步を踏み出そうか。

俺の声に検案していた書類から目を離し、主任が俺を珍しいといった表情で迎えた。

あまり主任とは接点がないため、こう話す機会はあまりない。そしてこれが最初で最後になるかもしれない。

「これを・・・」

俺は黙って一つの封筒『辞表届』を提出した。

本日の昼休み、再び俺と先輩は屋上でコーヒー片手にたむろしている。

話す内容は主に業務の引継ぎだ、俺が出した退職希望は25日聖夜である。ぶっちゃけ一番忙しい。

辞表を提出した後が一番大変だった、主任は俺が突然退職するといつて『やることやってからやめろ!』の一点張り。

しかたない、いきなり辞表届けを出す俺が悪い。本来なら1ヶ月前くらいに出すもんだが、俺はたった4日間で辞職したいですといったのだから。

あまり周りに迷惑は掛けなくなっただけに心苦しいが、もう期限が迫っている。八意さんももう少しゆとりをもってきて欲しかったな。

さて、後は同僚の上野にも頼んどこう。今の彼の状態はちと心配だが、我慢してもらおう。

後去り際に彼に言っておかなくてはならんな

「八意さんは俺が奪う!」

つてな

昨晚はやる気持ちを抑え帰宅した俺に、八意さんが最初にかけてくれた言葉は、

「さいかち 槐、後もう少しで出来るから、先にお風呂でもはいつてなさい」

・・・思わず結婚しているのではないだろうかと錯覚してしまいそうなシュチュエーションだ。

俺は軽く生返事で返して、洗面所付近で服を脱ぐ。

昨日から思っていたが八意さんは風呂どうしているんだろうか？

俺が仕事に行っている間に入っているとか・・・なかなかいいな。

い、いつもシャワーだったけど、今度浴槽にお湯でも入れて・・・

ゴン

そこで俺は頭を風呂場の扉に打ち付けて馬鹿な思考に緊急停止を命じた。

もうためだ、脳内が意味不明なデッドヒートを繰り広げている。主に理性と欲望の。

苦しい、狂おしい・・・溢れる。私の中から探究心という名の欲望が。

とりあえず、八意さん使用後湯船大作戦は保留にしといた。

ためだ、どんどん俺が駄目になっていくのが分かる。

だがしかし！八意さんが風呂に入っているのを想像してみろ！シャワーでもいいぞ！

・・・・・・・・・・・・・・・・

どうだ？

想像できたか？

な、なにかくるものないか？

八意さんの入浴中にのび太よろしく入るんだ。

でも彼女はシャワーの音で俺が入ってきたことには気付かない。

シャワーから流れる湯が彼女のスラリとした首筋を通ぬけ、豊満ではじける様な胸へと移り、それに反比例するようなくびれ、引き締まった腰へと流れ、極上の果実のように熟れたお尻のラインを通り抜け、ふつくらとした太ももへと落ちていく。

しつとりと濡れた前髪の滴り落ちる雫から覗かせる彼女の瞳は、ぬくもりに熱うかされ妖しく潤んでいて、ゾクリとするほど扇情的だ。彼女の全てが俺の急所を穿っている。白い靄が俺の視界を覆う、それはただ湯気だけのせいではなく、理性すら暴走している。

俺はふらふらとシャワーを浴びている彼女の柔肌をゆっくりと抱きしめる。

その時彼女は初めて俺の存在に気付き頬を上気させて「はぁ・・・」と吐息を洩らした。

彼女の肌は赤子のように瑞々しく潤っていて、羽毛のように柔らかで、理性を溶かす熱をもっていて・・・

「うわああああああああ！！！！！！何で俺はこんなに阿呆なんだああ！！！！」

再び風呂場の扉を殴打する音が、夜の闇に響き渡った。

「いただきます」

ズズズキと痛む頭を我慢しつつ、両手を合わせた。

本日の夕食はビーフストロガノフ、みたいなものとサラダだった。うん、確かに『みたいなもの』は失礼のような気もするが、なんせこのストロガノフ、色が緑なんだ。

思わず「何、これ？」と質問しそうになったが、正直今八意さんを正面から見る事が出来ない。もうどうしようもなく後悔している。妄想の中とはいえ八意さんに劣情を抱いてしまった。これがゲームや漫画のキャラクター話なら、悟った表情をして「何してるんだろぅ・・・俺」と呟けばいい。

が、しかしこれは現実、これが現実。

劣情を抱いた相手が目の前に居るわけで、しかもそれがゲームや漫画の登場人物で、さらには俺に飯まで作ってくれる。

なんか、申し訳ない。

俺に出来ることっていったらこの緑色のストロガノフを美味しく頂

くことだ。

えー、とりあえずサラダのドレッシングドレッシング・・・

「シーザーでいいかしら」

「あ、はい。それでいいです」

最近彼女の先読みスキルも慣れてきた。

気が利くってレベルではなく心を読んでいると思えなくもないくらい、俺の行動パターンを把握している。
なんだろう、勘がいいのだろうか？

とりあえず俺はこの緑色の物体をスプーンですくい上げた。

すごくいい匂いがするのだが、この色はどうにも出来なかったのだろうか。

ちよつとばかり躊躇したがぱくりと口に含んだ。

その刹那突如として口内で行われる味の七重奏セブレットの管弦楽団オーケストラに俺は愕然とした。

これほどうまいものがこの世に存在したのか・・・

昨日の和食も美味かった、だが俺はこっちの方が美味しく感じる。

この濃厚な味わい、しかし後味は吹き抜ける草原のように涼やかだった。

猛然と食べ始めた俺を八意さんは苦笑を一つ洩らして、自らのスプーンを動かし始めた。

「八意さんお話があります」

後片付けを相変わらずの謎の技術3分程度ですませ、居間に来た八意さんを俺は正座で迎えた。

彼女も俺の態度を察したのか方眉を軽く動かし、俺に倣って正座する。

大きく息を吸い込み氣力を充実させ、風船の様に膨れ上がったそれを弾き飛ばす勢いで声を上げた。

「決心ができました。俺は八意さんと一緒に幻想郷に行きたいと思っています」

俺の言葉に八意さんは目を細めて薄く微笑んだ。

「そう、決心がついたのね。分かっていると思うけど、幻想郷はこの地と異なる秩序で成り立っているわ。あなたはそれを受け入れられるかしら？」

「そのつもりです」

彼女の目を離さずに答える。俺は今もつ全てのしがらみを彼女のために犠牲にする。

家も家族も会社も友人も、彼女の傍に立つためにはそれらを全て置

き去りにしなければならぬ。

構わないとも。

俺は八意永琳という人物を一目みたあの時、価値観が音を立てて崩れ落ちるのを聞いた。

彼女に不釣り合いと感じながらも恋をした。

見惚れ、心酔し、憧憬した。

全てを白昼夢にして忘れ去ろうとした。

しかし俺は願った。

叶うのなら、叶うのなら、俺の声を拾い上げ叶える何かがあるのなら、もう一度……。

そして彼女はきた。

ここまでお膳立てされたんだ。

行くしかないよな？男が廃るか？もう二度目はないぞ？

「俺を、幻想郷へ行かせてください」

悩みに悩み、理念を振り、心を砕いた。

その結果に出た答えだ、もう悔いはない。

俺の目を離すことなく見ていた八意さんは、このとき間違いなく『俺だけ』を見詰っていた。

「いいわ、あなたを幻想郷へ導きましょう。この地への清算は済ませておきなさい」

「はい、明日にでも会社には辞表でもだそうかと思います」

「わかったわ、それじゃ・・・私はこの部屋で食べる最後の料理を作るとするわ」

楽しみにしてなさい。そう言って悪戯っぽくクスリと笑った。

「そうか、八意永琳には話したか」

例のごとくコーヒーを手の中で転がしながら先輩は言った。

「ええ、仕事終わったら親に話してアパート解約して終了です」

「俺もいけないよな？」

「無理ですね、八意さんにも聞いたんですけど俺だけだそうです」

先輩は残念そうに「そうか」とため息とともに吐き出した後、コーヒーを一気に飲みきってゴミ箱に投擲した。

「ちょっと早いが降りるか、お前やること山積みなんだろう？」

おつとそうだった、俺が抜ける引継ぎがそれこそ星数ほどある。

得意先の対応とかも上野に話しておかねば。俺は先輩にならないコーヒー缶をゴミ箱に捨てて先輩の後を追った。

しかし時期が時期だけに本当にやることが多い。

通常勤務と平行して引継ぎを行わなければならないからな、今日は残業か。

八意さんの料理が待ち遠しいが、仕方ない。

ここで下手にサボったら俺の我欲のために、周りしわ寄せがいく。さて、後四日間どう問題进行处理していくかな・・・

そのとき仕事場には不釣合いな騒ぎが聞こえてきた。

得意先からの電話もする仕事場で騒ぐとは言語道断で、先輩はそんな喧騒が大っ嫌いだった。

案の定、先輩は苦虫をつぶした表情をしながら仕事場へと入っていた。

恐らく中で待ち受けているのは先輩の凶器的な視線と威圧感、そし

て一喝。

俺はこのことには関与してないから全然構わないんだけど、今中に入る気は流石にない。

ほとぼりが収まるまで通路で待っとくか、しかしまたピリピリとした雰囲気の仕事かぁ。

肩が一段階下がる、ため息一つつきたい気分だ。

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

あれ？おかしい、喧騒が収まらない。

何故だ？先輩相手だぞ、主任だってその気になれば言うこと聞くのに。

不信に思った。

だってそうだろう？

今の今まで先輩の威圧感にやられていた皆が、今日に限って聞かないなんて理由ちよつと想像つかない。

おれは不信感を大に、それとほんのちよつぴりの好奇心を胸に、仕事場の中へと入っていった。

『ここです！このアパートに八意永琳らしき人物が入っていききました！』

テレビに映ったアナウンスの視線の先にはモザイクのかかったアパートが映し出されている。

俺は分かる、なんせ2年は見てきたのだ。間違いなく俺の住んでいるアパートだ。

『今日11時30分ごろ、市 のスーパーマーケットでお昼の食材を求めにきた主婦の中に東方Projectの登場人物、八意永琳と思わしき人物が徒歩で買い物に来ていたところを、張り込んでいたカメラマンが見つめました。八意永琳は買い物を終え、今度も空中を浮遊せず徒歩で帰ってりそしてこのアパートに入ってしまったということです。では近隣住民の声を聞いてみましょう、現場の井本さん？』

ぶっん

いい音して思考がシャッターを閉めた。今日の営業は終了しました。

「俺、今から スーパー行ってくる！」

「おい！後15分で昼休み終わるぞ！」

「構うものかあ！俺はえーりんと！添い遂げる！」

え？何これ？

えつと確かに、ええ？

八意さん？目立つ行動はついていませんでしたっけ？

茫然自失、その言葉が今の俺に一番あうのだろう。

まさしく俺は何も考えることができず白い灰となっていた。
しかしその俺に色をつけたのは、

「・・・・・・・・おい、なんかこれ。槐さいかしのアパートじゃね？」

隣に居る上野の野郎の台詞だった。

上野の言葉に聞いていた周囲の喧騒が唐突と消えた。

上野は俺のアパートに遊びに来たことがある。

確かにアパートにはモザイクはかかっているが、周囲の風景は鮮明に映し出されている。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

数十の目がこの俺に向けている。

探るような視線で、それでいて確信めいた表情で。

この日この時、俺が退社宣言をしたと同時の事態進行、疑うべき行動は端から端まで。

何をすればいいか？

要領のいい人間ならここですぐさまおどけて見せるか、上手い言い訳を考え付くのだろう。

しかし、俺は霊力を持っている以外は順当に凡人だった。

いままでそれに不満に思った事はない。周りと似ているということと一種の安心感すら感じていた。

だが、今それを呪う。

「……………先輩……………引継ぎを、お任せします……………だあああ—————！！！」

何も考え付かなかった。

だから俺は唯一できることをした。

すなわち……………！

「ああ！槐さいかち逃げやがった！！！！」

「殺す！あいつは殺さなければならぬ！！！！」

「槐さいかちいいいい！！！！！！！！」

そう、逃走という選択肢以外、浮かばなかった。

「うそだあああ！！！！何故だあああ！！！！八意さああああ！！！！」

「てめえ東方もろくにしらねえ癖にえーりんのこと喋んじゃねえええ！！！！」

「待て！そして死ね！！！！」

走る、走りぬけ、駆け抜ける。

階段を駆け下り、ロビーへ

受付嬢に駆け抜けざまに謝って、玄関口へ

このときばかりはまどろっこしく思える自動ドアを抜け出し、外へ

背後から迫る怒声と駆け音は意識外へ

「タクシー！ちょっと待てえ！！！！」

通り過ぎるタクシーを思わず飛び出た金切り声で呼び止め、転がるように入り込む。

「市　　まで！」

行き先を聞いた運転手は何か悟ったような笑みを浮かべて

「ああ、よくいるんですよ最近。なんでも女が空飛んで立って言う……」

「いいから早く出てください!」

思わず叫んでしまった俺の声に運転手は慌てて扉を閉め、迫ってくる全ての喧騒を置き去りにして走っていった。

会社の中は騒然としている。

皆口々に槐さいかちに関する情報を共有しようと躍起だ。

俺はタバコを探るように胸元に手を伸ばし、いつもの定位置にガムしかないことに気づき、顔をしかめた。

「刑部くん、君は槐さいかちがあの飛行少女と関係しているってしっていたのか?」

主任がおどおどと道に迷った少年のような態度で俺に聞いてきた。さて、どうするか……

「さあ？しりませんね、それより今出て行った阿呆どもをどうしますか？槐さいかちはやめるとして他の上野、笹原、藤岡は仕事の時間になっても戻ってきませんか？」

「え？ああ、そうだね」

「魔法だかなんだか知りませんが、それで仕事をサボっていい理由にはならないでしょう。それなりのペナルティが必要だと思うのですが」

「そう、だね。うんまあ総務部の連中と話してみるよ」

そそくさと逃げ出す主任を目の端で確認しつつ、右手で唇をなぞる。

ああ、しかしあいつとの最後の言葉が「引継ぎお願いします」とは、全く舐めた後輩だ。たぶん二度、会えるかどうかになるだろう。大きく一つため息を吐いた。

「早苗さんに、会いたかったなあ」

7話 何で俺はこんなに阿呆なんだ（後書き）

モチベ維持が一番大変だは

後PV一万ありがたや
これで

初心者 初級者

にジョブチェンジできました

読者の皆さん、愛してるとは言いません

ただ、好きだ！

だから評価はらめー本当にptがはっ！

8話 えーりん！えーりん！助けてえーりん！（前書き）

えーりん脳ですいません

だいが書き直しました

以前の出来損ないを見てしまった人に盛大に謝罪を
やっぱあれだね、眠気と肩組んでの共同作業はだめだね

8話 えーりん！えーりん！助けてえーりん！

目的地に近づくにつれタクシーの進行速度が徐々に緩やかになっていく。

それもそのはず、車道歩道問わず彼らの向かう先はまるで一緒に、皆獲物に群がる獣のように進む。それは彼らそのものが一つの生き物のように感じた。

もっとも俺もその一人であるということを否定するのは少しばかり難しいのだが。

今の気分は最低だ。

俺の目的地に思いを馳せ、憂鬱な表情で外に視線を投げかける。

・・・どう考えてもこれ無理だろ。

到着するのにまだ距離はあるはずなのに、日本三大祭りのごとく人の数。日本に1億2千万人いるといわれているが、ちょっと納得できる人ごみだ。

それに車の数も尋常じゃない、さつきからこのタクシー、まさしく亀の歩くスピードでしか進んでない。

というか実質止まっている。おいみんな、信号青だぞ？何故進まん。

シートに深く沈みこみ諦めにも似た心境でため息を吐き出した。

ここにいる人はみな八意さんを求めている居ないだろう。彼らはその先にある魔法という名の非常識を求めているのだ。

今の日本の低迷は著しい、もっとも顕著に現れているのは自殺者の数だろう。

希望がないのだ、出口の見えない袋小路、閉塞的な経済の疲弊に喘いでいる。

弱者救済がこれほど促進している国は他にないはずなのに、道行く

人々を見れば希望なく下を向いて歩いている。
ニュースは常に汚職と不祥事の連続、迷走する政界に弱体化する対
外交渉。

人々は明るいニュースに飢えていた。

人々は刹那的でも今の現状を忘れたかった。

人々は現状を取り巻く環境に新しい風が欲しかった。

結果これだ。

オイルショックに似た現象が今の日本を包んでいる。

当時の人間はトイレットペーパー求め、現代の人間は魔法を求める。
まさしくこの時期しか起き得ない絶好の機会というしかない。

俺は再度ため息を洩らし、動く気配のない前方の車列を眺めた。

「すみません、もうここで降ろしてください」

これ以上粘っても意味がない気がする。

少し癢だが、今歩道を歩いている眼鏡かけた小太り集団の中に紛れ
よう。俺は運転手に運賃を渡し、底冷えする外気に体を晒した。

『えーりん！えーりん！助けてえーりん！えーりん！えーりん！助
けてえーりん！』

「・・・・・・・・」

ム力つくぐらい子気味いい音頭を取りながら腕を振り進む小太り集団。俺は思わず呆然と眺め、思い返して後ろを振り向くと既にタクシーはUターンを終え、遠くに過ぎ去っていた。

悟った表情でまた阿呆な集団に目を向けて、口元の端をひくつかせる。

頑張れ俺

（えーりん！えーりん！助けてえーりん！）

頭の中でその音頭がぐるぐる回っている。

少し分かった、集団催眠ってこういう風になるんだ。

重く痛む頭を抱えながら、視線を上げて本日最高のため息を漏らした。

人

だいたい人

たまに車（アンテナ付）
ときおりフラッシュ

その情景が目指していた目的地を取り囲んでいた。

すごい人だかりしてるだろ？これ、俺のアパートなんだぜ・・・

携帯を開けて不在着信二桁を軽く無視し、ニュースを開ける。

・・・まだ、八意さんとのコンタクトは取れてないみたいだ。
ふう、と軽く安堵のため息をついた。

現状維持か、とりあえずは最低限に最高だ。

しかしさて、どう動くか。

まあここはベターにこのアパートの住人になりすまして突入が安定
だな。しかしこれ入れるのか？

「おいえーりんどこにいんだよ、見せる！」

「つーかマジ空飛んでたのか？」

「お前ら邪魔だあ！俺の嫁を迎えにいけねえだろーがあ！」

「うぜーぞ死ね！」

「ZUN来んの？」

「こねーだろjk」

頭をガシガシと少し乱暴にかき乱した後、覚悟を決める。

「くそっ、すいません通してください！」

すこし目立つが仕方あるまい、さっさと八意さんに物申したい。俺は人垣を掻き分けて、ゆっくりと着実にアパートへ近づいた。

アパート前には案の定テレビ関係者と思わしき人物が壁を作っている。

構うものが突っ切れ。

「そのあんた、今関係者以外立ち入りだよ」

やはり呼び止められた。

くそ、関係者って少なくとも仕切ってるあんたらが一番関係ないだろ！

舌打ちしたいのを堪え、口を開く。

「……このアパートの住人なんで」

「住人？何号室の誰？」

「309号室坂口です」

「ええっと・・・あ、はい確認取れました。どうぞ」

「・・・ッ」

すまん、坂口さん無断で名前語った。

つかこいつらなんでアパートの名簿持ってたんだよ！

今度は間違いなく舌打ちをしてアパートの中に入って階段を上る。

・・・半分予想はついてる、この階段を上へと続くケーブル見れば嫌でも。

そして悪い予感の外れようもなく、俺の部屋に軽く8人ほど集っている。

もう完璧にばれてらー、もう阿呆かと。

冷めた視線で見つめる俺の姿に気付いたのか、数名が俺に駆けつけてくる。

「すいません、303号室の槐^{さいかち}さんでいらっしゃいますか？」

「ちがいます、あと邪魔です奥に通してください」

「お話を・・・」

「通してください」

突き放すように話す俺に記者達は意表をつかれた様な表情を浮かべた後、慌てて俺に道を譲った。

・・・チャンスは一度のみ、これに失敗したら？考えることを放棄する！

正直賭け以外なんでもないがこれしか俺の部屋に突入する案が浮かばなかった。

頼む！八意さん！

端によった記者を煩わしそうに進み、件の303号室を通り抜けようとした刹那

俺はそのドアノブに素早く手を伸ばした。

突然の行動に周りの空気が一度死んだ。

それらを全て置き去りにして部屋に飛び込む俺に、その時初めて怒声が生まれる。

その喧騒を扉を閉じることでかき消し、後ろ手で鍵をかけた。

玄関の八意さんの靴を漫然とした表情で眺めた後、我に返る。

やった？成功し、た？

鍵が開いてるか否か五分だっただけに安堵の吐息と冷や汗が同時に

でた。

うおー！やったぞおお！

思わずガッツポーズしている俺に外の連中が

「あの野郎やりやがった」

「警察だ！警察呼べ」

くそ忌々しい！

「俺はこの部屋の持ち主の槐さいかち隆治りゅうじだ！」

俺は壁越しに叫び、ガンガン扉を叩いている間抜けを無視して部屋へと歩みを進め、少々乱暴に扉を開けた。

八意さんそこにいるんですね・・・！

果たして、八意さんがお茶を嗜みながら吉川某の三国志の読書に励んでいた。

外の騒然とした空気と全く逆、思わず草原で日向ぼっこしているようなゆったりとした時間の流れに、俺は思わず毒気を抜かれしまっ

た。

「早かったわね、もうすこし遅くなるかと思ったけど」

呆けた俺に八意さんは絹のようにスラリとした微笑を浮かべた。
今度は別の意味で惚けた、ってそうじゃないだら俺！

「八意さん！目立たないでくださいって言ったじゃないですか！何であんな・・・あんなことしたんですか！」

少し強い口調で問い詰める俺に八意さんはさらりと笑みを深くして受け流した。

「目立つ行動はとっていないわ。だって歩いて買出しに行ったんですもの」

「い、いや確かにそうなんですが・・・」

うん、間違っちゃいない。

八意さんは前回のようには霊力による浮遊はしていない、全うに常識の範囲内の行動だ。

それは俺も認めよう、けどね・・・

「なんで着替えなかったんですかああ！！！」

その赤青ドレスは現代社会においてあらゆる視点から見て浮いてる
だろおお！！！！

「そうは言っても、外の世界の服はちよつと野暮ってたくて・・・」

「や、野暮って・・・」

なんだ？地球人とムーレイスには格差的な美的センスがあるの
だろうか？ユニバース！

がくりと膝を折り両手を床につけ体を支えた。
もうだめだ、話が、かみ合わない。

二人の間に暫しの沈黙が流れる。
聞こえる音といったら湯沸し機のポットが時折放つ加熱音くらい
だった。

話は変わるけどこの音を聞くと冬の到来を感じさせてくれ？

・・・・・・・・・？

窓の外をちらりと見る。

あれほどの人だかりだ。さらに言うと家主の俺が帰ってきたのにも
かわらず、外の喧騒が全く聞こえない

「騒がしいから簡易結界張っているわ。本を読むにはあの喧騒は、あまり優雅ではないでしょう?」

・・・そうですか、もうなんでもありですね。

不意に俺が一人相撲をとってる気分になってきた。

いや八意さんから見れば間違いなくとってるだろう。

相変わらず彼女が俺を見る表情は、犬をからかった時どいう反応を示すか楽しくてしょうがないみたいな表情だ。

ああ、もうこのまま床に倒れこみたい。今までの俺の心労はなんだったんだろう?

「槐、さいかち そついえばお昼は食べたのかしら?」

・・・そりゃ、凄まじくすいている。

引継ぎで忙しかったからカロリーメイトと缶コーヒーで済ました。

顔を上げると小さな子供を見届ける母親のような自愛に満ちた笑みを浮かべている。

「・・・・・・食べてないです」

「そつ、じゃあすぐに用意するわね」

八意さんはそういつて台所に向かつていった。

・・・負けた、もう負けでいい。

そうさ、恋なんて惚れたほうが負けなのさ。

結局その日は、我が牙城で過ごす最後の時間を八意さんとゆったり過ごした。

テレビで見る俺のアパートの外の喧騒を、リアルタイムで見れるとはなかなか感傷深いが、テレビで流れる怒声を完璧にシャットアウトする結界ってすごいね。何でもありだね。

「結界術式は得意よ。深い昔が懐かしいわね、また術式戦でもやってみたいわ」

術式戦ってなにそれ怖い。

八意さんって血気盛んなんですか？

「さあ？昔はどうか知らないけど、今はそんなことはないわよ？」

何ゆえ疑問系？

「ふふ、私も負けず嫌いだったってことよ」

俺も結構負けず嫌いですよ。

不甲斐ない自分に腹たつてもっと！さらに！とか思っちゃいます。

我ながら単純だなあ、とか思いつつ前のめりな会話をする俺に八意さんは相変わらず慈愛の笑みを浮かべていた。

翌日の朝、なのだがスズメの鳴き声がしないとは、ちょっと記憶がない。

俺のアパートの近くに木が立っているせいで、朝はスズメが目覚まし替わりになるくらいうるさいのに、これも結界の効果か。

うーん今日が12月23日だから・・・後2日か。
クリスマス
そう、聖夜に幻想入りする計算になる。

今日でこの家とおさらばする予定だ。現在の時刻は7時過ぎあたり、人が本格的に動き出すにはまだ少し早い時間だろう。カーテンをずらして外は覗くと、嫌な曇天の下にまばらとは言え今だ十数人の人間が俺のアパートを取り囲んでいる。人はこれでも減ったはずだが、まだまだ予断は許されない。さあて、どうやってあの連中を撒こうかね？

「槐、^{さいかち}どうしてもこれじゃなきゃ駄目かしら？」

扉越しに聞こえる八意さんの声に、俺は外への関心をそっくりそのまま彼女に向けた。

彼女の衣装は少しばかり目立ちすぎる。特に相手を撒こうとしてるのあの格好は自分がここに居ることを宣伝しているようなものだ。よって八意さんには俺の持っている男女兼用にも見えなくてもない服を提供しているのだが、八意さんは少々渋った。

なんかセンスがないらしい。ほつといて下さい！

「駄目です。郷に入れば郷に従え、ここでは八意さんの衣装は目立ちますので隠れながら進むのはちょっと難しいです」

「はあ、しかたないわね」

そういつて彼女は扉を開けた。

．．．．．なんてことをしてくれたんだ、俺。

そんな、こんな．．．

俺の渡したジーンズは彼女の流れるような足のラインを浮き立たせ、特にお尻の円熟さは饒舌するに難しい。

赤のジャケットから覗かせる黒のセーターに隠されたたわわに熟れた果実は扇情的すらある。

そして何より彼女の少しばかり紅潮した頬とふくよかな唇、存在感を際立たせる白銀の髪に、憂いを帯びた瞳。

完璧だった。

この世に完璧なものなんてないって言った奴はこれを見たらすぐさま改心するだろう。

う、静まれ俺の両腕！

確かに今の八意さんをこの手で覆いたいのはよく分かる！

ブルブル震えて何も言えない俺に八意さんは不安げな表情を浮かべた。

「やっぱり似合っていないわよね」

がしつと彼女の両手を握り締めて八意さんの顔を正面から覗き込んだ。

普段なら長時間見れず照れてしまう俺でも、この時ばかりはそんなこと考えてられなかった。

「八意さん、ありがとうございます」

……俺は、何を言ってるんだ

自分でも何を言ってるのか理解できなかった。

頭がぐちゃぐちゃに攪拌されて、今この現状すら頭の中から消え去っていた。

そして彼女も俺が何言ってるか、わからないはずなのに

「ええ、どういたしまして槐さいかち」

彼女の微笑みに俺は救われた。

ぐはっ

さて、どうやってこの隔絶された空間から抜け出そうか。

生憎俺のアパートは突然建物が潰れたとしても「あれ？ここなにかあつたっけ？」と思われるくらい、全うに普通のアパートである。

そんな普通のアパートに凝ったギミックを期待するだけ無駄であり、それでも探そうとする奴はただの現実逃避野郎だ。

正当法で行くしかないだろう。

重要なのは連中が俺と八意さんから意識を離すことが必要だ。

うーん、どうしよう。

外の連中に仲間を紛れさせて陽動作戦、か。

いや、難しいな。そもそも俺に協力してくれる人間なんているか？俺の立場が逆で協力してくれと言われたら？

- 1 . 陽動に協力するが、何かしらの利を要求
- 2 . 報道陣に密告して、陽動されたフリをして俺たちを確保
- 3 . そもそも断る

ま、大筋はこんなもんだらう。

協力してくれたと仮定しても、相手にもよるがほぼ間違いなく八意

さんとの接触及び霊力の有無又は保持の要求、こんなところか。
後者二つは許せるが前者は許せん、なんとなく。

先輩ならワンチャンあるが、先輩には仕事の引継ぎを押し付けてしまったし、これ以上甘えるのはよくないし・・・

「何を考えてるの？」

悩んでいる俺に八意さんはひょいっと俺の顔を覗き込んだ。

ぐう、仰け反りそうになるのをかるうじで抑え、八意さんの質問に答えた。

「いや、ここからどうやって上手く相手を撒けばいいか考えているんです」

その俺の答えに瞳を数回しばかたせたと思ったたら今度はくすくすと笑い始めた。

「な、なんですか」

「いえ、なんて単純なことで悩んでるのか、と思ってね」

単純と申したか。

間違いではないが釈然としないぞ。

「じゃあ八意さんはもう既に解決策がある、と？」

「ええ、もちろん相手を撒けばいいのでしょうか？」

いや、そうなんだけどそれが出来れば苦労はしない。

とにかくこちらの悪条件が多すぎるのだ。地理的にも人員的にも。しかしそう考える俺を全く意に介さず自信に溢れた笑みを浮かべる八意さんをみると、本当になにか考え付いたのだと思わされた。ちよつと悔しい。昨日から俺がずっと考えたことをものの数秒で思いついた八意さんがなんとも恨めしい。

「けどこの部屋は3階ですし立地条件的にも不利です。それに恐らくですがこのアパート全体、間違いない見張られています。安易な陽動作戦は相手の思う壺ですよ」

何を言っているんだ、子供じゃないんだから。

しかしやっぱり、悔しい。俺は彼女と並び立ちたかった、だがあの笑みを見るとどうしようもないほどの差を見せ付けられたようで。そんな負け惜しみ似た俺の発言を、八意さんは案の定一蹴した。

「着眼点はいいけど、それだけじゃまだまだね」

彼女は凜々しい笑みを投げかけ、カーテンの締め切った窓へと歩み

を進めた。

あそこは大通りを一望できる唯一の窓だ。逆に言うと大通りから俺の部屋の状況を視認しようと思うのなら、この窓の存在を最有力候補として監視する必要がある。

そんな人がもつとも注目しているであろう部位を八意さんは全く意に介さず、まるで早朝起きたとき、今日の天気を確認するような気軽な動作でその窓を開け放った。

その瞬間新鮮な外の空気と冷氣と共に、外のざわめきがこの部屋に怒涛のように流れ込んできた。

「永、琳？・・・永琳だ！八意永琳があ窓に！」

「え？でも服違うくね？」

「着替えたんだろ、きつとさ！なんだ？何をする気だ？」

「えーりーーん！！！！俺だあああ！！！！」

「お前誰だよ」

瞬くカメラのフラッシュと湧き上がる歓声。

一体彼女は何をする気なのだろうか？いんちき臭い説得か、もしくは霊力による結界的な何かを作るつもりなのか？

八意さんの動向に俺は意識を集中させた。

前者を採用するのなら催眠のような術式を用いなければ彼らを退散させることは難しいだろう。

彼らは今残っている彼らは知的好奇心だけではない、仕事という使命感をも燃やして挑んできている。

倫理に訴える説得など彼らの心を動かすには足りない。

だがそれが可能ならばもつとも穏便に済ませられる行動かと思われる。

もちろん催眠の術式を見られないことが前提、かつこちらを映す力メウにも効果があるのかも加味しなければ事象だろう。

ならば後者は、音を隔絶する結界を作ることが出来た彼女ならば、俺たちの存在を隠匿する結界なんてのも可能ではないだろうか？
もちろんこれは推測にすぎないが、霊力とか魔力の術式工程を知らない俺としては想像することが精一杯なのだ。

しかし彼女は俺の予想、そして外から溢れる喧騒その全てに背を向け、俺に手を差し伸べた。

まさしく予想外。

俺の予想を尽く外し、覆し、突然の行動に俺は馬鹿みたいに口を半開きにしてしまっていた。

そんな醜態を晒しながら俺はふらふらと花蜜に誘われる蜂の様に、なんの疑問浮かんでこないまま彼女の手を握り返した。

そして痛感するその読み全てを外した先に待っていた彼女の思案を。

その身に襲い掛かる強烈な違和感によって

皆、空に一度は大望を抱いたことはないだろうか？

俺はある、もし霊力とか魔力とかが一般化したのなら何がしてみたい？と問われるなら、俺は・・・

突然襲い掛かる無重力にも似た浮遊感

顔を圧迫する早朝の冷たい空気

足元から聞こえる多くの声の大瀑布

そう・・・まさしく、俺は空を・・・

「う、あああああああああああああ……！！！！！！！！！」

飛んでいるううううう！！！？？？？？

迫るグレーの雲、下に落ちていくビル、鳥が羽を動かしながら俺の横を停滞している。

いや、俺たちが上に飛んでいる。

全ての喧騒は疎外化し、救急車が通ったドゥプラー効果のように遠く伸びていく。

もう俺の周りには何もない。

下を覗くと拡大地図を縮小して様をこの肉眼で見取れる。

上を仰ぐと迫り来る雲、そして彼女と俺を繋ぐ腕。

俺は彼女のはためく銀髪を眺めていた。

・・・なんて乱暴な選択肢だろう。考えていた全ての観点をぶっ壊して彼女は飛ぶ。

彼女の軽率な行動に、苛立ちさえ覚えた。

しかしそれ以上に、俺は自由に飛行していることに心を躍らせていた。

空への渴望、男なら一度なら夢を見たんじゃないだろうか？

ライト兄弟然り、オーガスタス然り、オクターヴ然り。

空を鳥のように自由に飛べたらどれだけ素敵だろうか。

人はそれを夢見て飛行機を作った、しかし今の現代ではそれですら満足できない。

本当に、自由に、体全体で風を感じたいと思ったのではないだろうか？

故に人は空想した。ありえない空想科学を信じたいと願ったのだ。

しかしそんなことある訳ない、空想夢想夢幻だと納得し、心の中で渴望していた。

それが、今この場で起きているのだ。

「・・・八意さん、俺も幻想郷へ行ったら空を飛ぶことって出

来ますか？」

八意さんはこちらに視線を向けることなく返答を返した。

「難しいわね、靈力の絶対量の少ないあなたが空を飛ぶのは、相当辛い鍛錬が必要よ。耐えられるかしら？」

脅しにも似た言葉だったが、俺は不安より先に歓喜が胸を埋め尽くす。

八意さんはこういつているのだ、頑張り次第で飛べるのだと。

頑張れば飛べるのだ。

比較したらよく分かる、普通は頑張ったって飛べないはずだ。

きっと今の俺の表情は欲しがっていたトランプットを買ってもらった少年のように輝いているのだろう。

そんな俺の表情をしってかしらずか、八意さんは警告を促した。

「さあこの雲を抜ければ撮影機なんていう無粋な物から逃れられるわ。障壁を張るわ、離れないで」

雲に入る。

順当に考えるのならばまさしく愚考だ。

何の対策もしていないただの人間が強烈な気圧変化に耐え切れるはずはない。そんな常識を彼女と俺を包む膜によって明後日の方角へと弾かれた。

そう、よく考えてみたら空を飛んでいる事自体非常識じゃあないか。

雲を切り裂く、突き抜ける。

果たしてその先に

「あ．．．」

雲を地に、蒼天が映し出す太陽に、俺は心を打たれた。

その風景は一度は見たことがあった。

飛行機での光景、透明なガラス越しに見るその風景に俺は感嘆したものだった。

しかし、俺は再び、いやそれ以上に感動している。

風を肌で感じ、一秒と同じ形をとどめ様とはしない雲に胸を動かされ、蒼穹を映し出す燦然と輝く太陽に目を動かさざるおえなかった。

まさに天地に一つ、この光景は存在しないだろう。

「気に入ってもらえた様で幸いね」

その声到我を帰した。

日の出が映し出す彼女のほんの少しの得意げな横顔を見惚れること数秒。

再び自我を取り戻して足元に何もない不安定な感覚に、俺は思わず彼女の腕を抱き込んだ。

「うおお！！これ、なんで俺浮いてんの！？もしかして手を離したら落ちるとか！？」

「ええそうね。今あなたは私の術式に乗っかる形で浮いているわ。その接続点がこの手よ。せいぜい離さないことね」

「ま、マジですか。」

その言葉に抱き込んだ彼女の腕にさらに力を込めた。

雲の上っていうと標高1キロ以上あるだろ、そこからパラシュートなしのスカイダンビングっていったい何回人生振り返られるんだ。いや、それじゃない。

そんなことはいいんだ、いやよくないけど。

「ってそんなことより八意さん！何で大衆の面前で空飛んだんです

か！」

確かにあの連中は撒くことに成功した。

しかしこれで確定した、八意永琳は本物だと。そしてそれは幻想郷の肯定に他ならない。

そんな俺の焦りも空しく八意さんは澄ました顔で答えた。

「何故って、もう一度飛んでるのに隠す必要なんてあるのかしら？」

その答えに俺の疑点のパズルが嫌が応にもに組みあがっていく。

先輩、あなたの推測はどうやらあっているようですよ。

彼女は間違いなく、幻想郷の管理者、八雲紫と繋がっている。

今の今まで彼女と一緒に居れば単純明快、算数の問題を解いている方が楽に思えるほど。

八意さんは恐ろしいまでに聡明だった。

その彼女が幻想郷の理を知らぬはずが、いやそもそもその理を教えにくれたのは八意さんなのだ。その彼女が幻想郷の存在を明るみに出すだって？ありえない。

八雲紫によつて締め出しを食らうかもしれない状況なのに、彼女はそれを一切気にしたそぶりは見せていない。

ならばもう答えは出ている、あまり考えなくなかった事実だけに衝撃も大きい。八雲紫は、この状況を容認しているとは思えない。八意さんが大きく世間の目に触れたのは、1度目も2度目もここぞとしか言えないタイミングだった。

しかし何故、何のために、その答えを見るには今だ見当たらないピ

ーが多すぎる。

俺たちの世界は八雲紫に、八意さんに振り回され、変化していく。俺は何も出来ずに、ただ流されるままだ。

本来ならば思い直した方がいいのか？

今だならまだ、まだ間に合う、引き返せる。

ああ、だが、なんてこった。ああ、くそっなんてキレイなんだ。

彼女の存在は、その全ての思惑を乗り越えてでも、俺は彼女の傍に立っていたかった。

8話 えーりん！えーりん！助けてえーりん！（後書き）

いやっほうー！！！！

問題が一つ解決したぜえ！

突然同僚に「ちょ、おま、何しろてるのwww」って言われずにすむ！

やったー！！！！

もう評価されてpt上がっても「うん、うれしいんだけどさあ・・・

」とかふざけた事考えなくていいんだ！

お気に入り登録してくださった皆様に、ありがとう！

評価されたら微妙な顔をするのに、してくださった方4名の方に愛してるう！

いや本当素直に感謝できるって素晴らしいですね

9話 おまけ以下の存在

「八意さん今からどこへ向かうつもりですか？」

ほんの少しばかり振るえる声で質問する。

警戒心を覗かせた俺の音質の変化を彼女は敏感に感じ取り、笑みを深くした。

「あなたの考えていることは大体分かるわ。私が八雲紫と組んで、幻想郷の為にあなたを管理者に引き渡すのではないか、かしらね。私は差し詰め彼女の指示通りに動く出来のいいお人形ってところかしらね」

そう彼女は俺の考えを看破し、ますます笑みを深くした。

「そうなたらあなたの末路は？考えなくても分かる、幻想郷の歯車と一生振り回されるのが落ち。あなたの利用価値はその一点、外の世界のパイプとして、何より外の憎悪と妬みを一身に受け止めるだけのフィルター」

そうだろうさ。

八雲紫が幻想郷のためにこの騒動を起こしたというのなら、この騒動の中心である俺は一体何の為に必要か。

幻想郷は多くの失われた技術が存在する。特に人々が注目すべきところは霊力や魔力の加工だろう。

人が一度は思い描いた幻想がそこにあるのなら、皆はこぞってそこへとなだれ込む。

しかし、それでは幻想が幻想でなくなる。

もし俺が管理者をやっているのならば、こちらの移転は禁止するだろう。

霊力も魔術も何らかの理由あって幻想と化した、それを今更万人の目に触れさせるのは暴挙に他ならない。それこそ何のための幻想郷だ。

また技術の安易な提供は、幻想郷のアドバンテージの失墜を意味する。せっかく謎技術で鎖国を行っているのに、技術漏洩を許すと簡単に他の勢力からの進行が始まる。

ならばもつとも幻想郷に有効なのは、外の世界に『幻想郷はある』というのを認識のみさせ、幻想郷そのものは保護した状態で外の世界と交渉のみ行う、これに限る。

こうすることにより世界各国からくる霊力・魔力の加工を餌に、常に幻想郷は上位に立て、さらに外の世界の羨望・憧憬を幻想郷の信仰の力として利用し、さらに幻想郷は力をつける。

と、一見多くの利点がありそうにも見えるが、欠点としては幻想郷は多くの憎悪や妬みを買う事だろう。

霊力・魔力など、全く未知であり新たに三次エネルギー資源とも示唆してもいい、稀有な技術の独占をしてるのだから、当然といえば当然。

それを全体に公開することなく、小出しにし、出し惜しみをする幻想郷はさぞかし対外的にみて齒がゆいことだろう。

最悪、三次エネルギーに頼らず純科学での成長を望む派と、三次エ

ネルギーに頼り幻想を紡ぐ派と大きく二分する。そうなつては幻想郷といえど混乱の渦に巻き込まれざるおえない。よつて幻想郷は敵意の矛先をいかに向けさせない様にするか腐心する。

幻想郷と俺たちの世界、その間に何かワンクッションを起きたいのだ。

ならばそこに、外の世界の住人であるにも関わらず幻想入りした人間がいるとしたら？

さらにそいつが幻想郷と外の世界を繋ぐパイプ役として働いていたら？

もう答えは出ただろう、幻想郷の憎悪をこの俺に向けさせること、これこそが俺の幻想郷での存在意義。

何よりもこれこそが、俺がもつとも警戒していた事態。

しかしそんな俺の危機感を八意さんは笑みを消して瞳を鋭く刺すように向けてきた。

「だけど、その考えは私に対する侮辱だわ」

初めて浮かべる彼女の怒気に思わず気圧された。怯んだ俺の姿に八意さんは続ける。

「今の私は確かに幻想郷の住人である、でもそれ以上に蓬莱山輝夜の従者よ。妖怪の賢者ごとき操り人形なんてもつての他、舐められたものね」

強まる彼女の威圧に俺は成すすべなく狼狽する。

ここが上空1,000m、八意さんの加護の元に成り立っているから、それだけではない。

彼女に呆れられ、見捨てられることが俺は何より恐れている。

だが俺の焦りを生み出したのが彼女なら、それを溶解させたのも彼女だった。

「でも、それでいいのよ。全てあるがままに能動的に受け入れるのは愚者の発想。その点あなたは目先の欲に囚われず、時代のうねりを大きく感じ取り、そして自分が如何に薄氷の上にいるかを認識した」

そう言つて先ほどの威圧はどこへやら、八意さんはいつもの様に子の成長を見守る親のような眼差しで俺を見た。

「安心なさい。言つたでしょう、あなたは私の客人よ。あなたの身の安全はこの『月の頭脳』八意永琳の名にかけて保障するわ」

八意さんの誇りにかけての保障。

それがどれほどの影響力を得るのか分からないが、だが彼女が俺の身の安全を守ってくれることに安堵し、そしてそれ以上に恥じた。

おいおい、結局俺は八意さんを信用しきれてなかったんじゃないのか？

彼女との情報のやり取りもせず、全て自分の推測で物をいつてたんじゃないのか？

幻想郷へ行くと決めた時点で覚悟を決めたんじゃないのか？

「八意さん……すいません、でした。ありがとうございます」

まったく情けない、結局俺の独り相撲、一人で何とかしようとした結果がこれだ。

そろそろ自分の矮小さを理解するべきだな、はあ……

つと、反省なんて後で出来る。

その前に聞いておかなければならぬだろう。

「しかし一体どうやって俺の、身の安全を？」

「八意紫には、槐^{さいかち}。あなたには今回の騒動に関する一切の干渉を行わないと確約させた。そして幻想入りさせる過程の交換条件で提示したのがこの騒動。もっともあなたの不干渉には期限があるけどね」

「それは……？」

やはりその話は上手くないのだろう。かの管理人は俺を緩衝地帯として使いた・・・

「10世紀よ」

・・・？

はい？

えっと、あれ？

聞き間違えたかな？

「え？10年ですか？」

「10世紀よ」

は？なにそれ？

もう何がなんだか桁違いの期限に啞然としている俺の姿をみて、八意さんはクスクスと小さく笑い出した。
ああ、なるほど。つまりこれは

「・・・冗談ですか？」

そうだろう、10世紀の期限なんて、有限に見える無期限と変わらない。

海外には実刑判決懲役300年とかあるらしい。300年で、もうそれなら終身刑でいいじゃん。

しかしそんな予想全てを裏切り八意さんはもう一度いった。

「いいえ、本当に10世紀よ」

いまから10世紀前、そう1000年前ってなんだったわけ？
ん~~~~、平安時代？

で、今から1000年後かあ、地球まともに残ってるかなあ

って

「んな阿呆なあ！」

俺の叫び声が雲と大空の間に響き渡った。

「まあ飛行の術式を展開しただけで、これほどの悶着が起ころうとは思っていなかったけどね。拍子抜けしたわ」

なるほど、驚いてた理由はそれか。

そして今俺は田舎の田舎、雪降り積もるそんな田舎の片隅にある民宿で布団に抱かれ震える体を慰めてもらっている。

その後、俺と八意さん幻想郷を目指し北陸の方へと上がって行き、そして増えてゆくヘリの数に知らぬ顔で突破していこうとする彼女を宥めて、この地に降り立った。

携帯を開けると案の定圏外、一応脱出する前に荷造りしたカバンの中にノーパソも入っているが、当然使えないだろう。

といってもテレビは繋がっているので、完全に情報隔離されているわけではない、が今時ケーブルかよ。

その肝心のテレビも居間にしかなく、腰が悪くと耳の遠いばあちゃんが見る時代劇専用物と成り果てている。

果たして幻想郷はどこにあるか？

以前幻想郷について話を聞いたところによると、日本全国に点在しているという。

ナゾナゾか何かと思った俺を八意さんはイマイチよく分かんない理論で教えてくれた。というのもも術式を絡めた理論展開で、半分以上分からなかったがかるうじで把握したのは

- ・幻想郷とは多くの幻想となった場所の集合体である
- ・基点を博麗神社におき、他がとりもちの用に繋がった結果である
- ・幻想郷の扉は個にあらず、北陸飛んで四国までの幻想と化した場所の境界線上複数に、幻想入りの点がある

と、いうことだ。

しかし今回は八雲紫が扉を用意してくれているというので、境界の綻びを探す手間はなく合流地点に行けばいいとのこと。

一つは南端に位置する天石門別神社あまのいわとわけじんじやそしてもう一つ北陸の奥地にある神社。

「あめふりのみやみねかたすわじんじゃ
雨降宮嶺方諏訪神社かあ」

呼びにくい、なんだこれ？つーか聞いたことないんだけど。
いや、だからこそ幻想と化したの、か？

ああ、くそ調べたい。

回線さえ繋がってればっ！！！！

そこで俺は思いなおした。

あれ？ここの電話回線貸してもらえればよくね？

・・・なんか少々問題かもしれんが仕方ない。

今は緊急事態なのだ！携帯の履歴はともかくメールを見たら呪詛の
ような文章が数十件入っていた、おそろしあん。

ちなみに先輩からもメールが来てた

「殺人予告が某掲示板に張られてるぞ、しかもくそ伸びてる。注意
しろ」

ちよつとほっこりした。

さすが先輩、かっこいい・・・あれ？

「殺人予告が某掲示板に張られてるぞ、しかもくそ伸びてる。注意
しろ」

最後に、爆発しろ」

先輩・・・

もしも自分だけ、自分だけが霊力とか魔力とかいう不思議エネルギーを使い、空を自由に飛ぶことが出来たら。想像したことがあるだろうか？

空を鳥のように飛びまわり、地を歩く人たちに優越感を感じながら笑みを投げかけ、さらに高く、もっと高く。

高層ビルの隙間を縫うように飛び、時には地上めがけ急降下をしかけ、そして雲の絨毯を優雅に散歩する。

ビルの中に居た人々は書類や電話の受話器を思わず落とし呆然と、地上にいた人たちは突然の大型飛行物体に腰を抜かし驚愕を、飛行機を操作するパイロット突如訪れた変事に錯乱する。

それを自身は悪戯が成功した子供のように笑うのだ。

ちよつと学校に行つて来る。ちよつと仕事に行つて来る。

そういつて空へと飛び立つ、皆自分を羨望の眼差しで見送る。

着地場所はもちろん屋上、時間が余って天気がいいならそこでちよつと日向ぼっこなんて憧れるね。

仲間たちは羨ましがらう。いや、見るもの全ての期待を一身に受けるだろう。

皆心の中でそんな非常識を求めている。

日本でライトノベルが廃れない理由、もっと視野を広く持ったらハリポッターなんていい例だろう。

あの本こそ、全世界に話題と反響を呼んだ王道ファンタジーの金字塔。

そう、まさしく世界に広がった。それはつまりこの世の人々が心の中でファンタジーを求めていたに違いない。

そして今まさしく、俺はその不思議ファンタジーの階に手をかけた。しかし

「不自由だなあ、ほんと・・・」

もしそれが本当に起こったとき、想像上の通り能天気には振舞えるのだろうか？

結論はもう出てる。とてもじゃないが振舞えない。

人は羨望する、ここまではいい。

しかし俺一人独占してしまっている、これが問題だ。出る杭は叩かれるとはいうが、まさしくその通り。

突出した存在は羨望、憧れよりも先に、嫉妬や妬みが生まれる。

それを思う数が増えれば増えるほど、感情というのは暴走する。

赤信号、みんなで渡れば怖くない。これは言葉っていうのは実に奥深いと俺は思う。

人は責任の分割を行うことで、多くの支持を得られることで、時にどんな悪行も許されることがある。

もっと簡単に考えようか、もし自身が空を飛ぶのを羨望するだけではないその他大勢なら？

どうだ？答えはすぐでたんじゃないだろうか？

我慢できるか、あんな能天気には空を飛んでいる馬鹿を。

地べたに這いつくばらせて、叶えてやろうじゃないか。

俺たちの夢を。

「うう・・・なんでこんな事態に」

八意さんが飛び立つところ、確かにそれは大いに話題をよんだ。しかしそれ以上に議論が白熱しているのは

『幻想郷へ行く！？槐さいかち隆治りゅうじの謎を追え！！』

どうしてこうなった？

今一番話題にすべきなのは、背筋が凍るほど美しい八意永琳さんじゃないか！

俺なんて別にどうでもいいよね！！おまけ以下の存在だよね！！
こんだけ俺に視点を向けるなんて、もう誰かの陰謀だよね！！

確かに八意さんに連れられて大空へ行っただけださ。

その上同居なんてしてただけださ。

逆に俺の立場なら、そりゃキレルけどさ。

・・・いや、もうやめよう。

墓穴を自分で掘ってどうするんだ。

「・・・・・・・・ん？」

その時俺は思わず、パソコンから指を離し一つの記事を凝視する。
それを何度も読み返し、居てもたっていられず俺は八意さんを探しに出かけた。

「八意さん、すみません。明日よりたい所あるんですけど」

『東方Project 作者ZUN氏による緊急記者会見 12月24日』

9話 おまけ以下の存在（後書き）

次の10話で幻想郷です
とりあえず予定通り

そしてようやく他キャラが出せます
長かった、でもここまで派手に幻想入りして後で辻褄あわせ様とし
たら、色々外せない点あるんで致し方なし

10話 好きとかそういう次元じゃない(前編)(前書き)

なげえー！ー！！！！

ので分割

仕事終わったら次がんばる

10話 好きとかそういう次元じゃない（前編）

上空1000m、一人の男が黒の防寒着を着用して、この寒空の下カメラを抱いていた。

程よく年齢を重ね、仕事の油がもつとも乗っているであろう男は、くたびれた表情を浮かべながらネオン輝く地上を空しく眺めていた。

（ああ、なんで私はここにいるんだろう）

せすには居られない自問自答を自分自身に投げ、胸ポケットを探りやくたびれたのラッキーストライクを取り出すと、ライターに手を伸ばした。

「ヘリの中で煙草は厳禁ですよ」

といったのは部下の池田だ。長い髪を後頭部で結び、少しばかりチャラけた感じの男である。

しかし私はその忠告を無視してライターに火をつけた。

強風に煽られ消えそうになるライターの灯火を必死に守りながら、煙草に火を灯すとその紫煙を一気にフィルター越しに吸い込み肺に溜め込む。

・・・うまい

「あゝあ、もう何言われてもしりませんよ僕は」

「うつせ、そもそもなんでこんな馬鹿みたいなことで、俺が駆り出されなきゃなんねーんだよ」

無粋な部下の発言に胸糞悪くなり、私は大きく備え付けのソファーにもたれ掛かった。

「そもそも、なに？東方、だっけ？ビターしらねえよ、なんだそりゃ。世間様じゃえらく騒ぎ立てているようだが、あんなもん幻想に決まってるだろう」

再び煙草を啜え、紫煙を吸い込む。
うーむ、エクセレント。

「はあ、ですがその作品に登場するキャラクターかなんかが、えーつと槐さいかちだっただけかな？それ連れて空飛んだ映像が」

「んなもん作りものに決まってるだろ。今の合成技術は何だって出来るんだよ。たとえば生中継っぽく見せる技術なんて、それこそ両手で数え切れるような数じゃねえ」

全く、これだから新人は、映像に映るもの全て信じまいやる。忌々しく煙草を携帯灰皿で捻り潰すと、次の煙草を取り出す。それを池田は方眉をぴくりと動かしたが今度は何も言わなかった。

「そもそもだ。人間がどうやって空を飛ぶ。羽もねえのに。魔力とかなんだか摩訶不思議な技術があるなら何で皆それ使わなかったんだよ。だいたい今俺たちが受けている重力をどうやって相殺するんだよ」

私の全うな疑問に池田は「それは・・・」ともごもご口の中で答えを出そうと必死だったが、結局口を閉じた。

「それみる。つーか魔力で空飛べたんなら、他の生物が何万年の進化をへて空へ飛ばたいた労力はいつたいなんだ。進化論の大前提否定してんじゃねーか。そも、そんなら一匹ぐらい魔力使える動物いてもおかしくないだろ」

「ああもう分かりましたよ！それじゃあなんでこんな事態起きたんですか」

いい加減な夢から醒めたであろう池田の疑問は、今現状置かれている状況へと変わった。

そう私たちの置かれている状況、すなわち

「こんな事態っていうとあれか、この撮影用ヘリコプター使ったの飛行少女探しのことか？」

そう、今私たちは上からの業務命令でヘリを活用した、空中搜索の真っ最中である。

カメラ片手に真冬の寒空へと舞い上がり、狭くて煩いヘリの内部で、ありもしない幻想を追いかけるなければならないのだ。

「全く馬鹿馬鹿しい限りだよな。下ではイヴのイベント盛りだくさんだったのに、娘の約束断ってやる仕事がこんな・・・全く馬鹿馬鹿しい」

「今日はその東方projectの製作者の会見あるみたいですからね。ここでちょっとした話題作りでもしておきたいんでしょうね、きつと」

バラバラと不愉快なヘリのプロペラの音に眉を顰めながら、私は荒ぶる風を両手で遮り、再び煙草に火をつけた。
取り付けの席に深く座り込みながら、私は苛立ちを紛らわすかのように紫煙の昇らせる。

隣に座るサポート役の池田は、話が一区切りついたのか黙ってカメラのテープの確認をしている。

結局何が悪いかっていったら、面白半分に騒ぎ立てている私たち報道陣がもつとも悪いだろう。

言いように大衆の羨望に踊らされて、そして数字が取れると分かるや否や、それを煽る私たち報道陣が。

我ながら空しくなってくる。

私の初心は一体なんだったのだろうか？

私は何に憧れてこの業界に入ったんだ？

私の求めていた夢は幻想でしかなかったことに気付いたのは？

だが残念ながら私は、その擦り切れた記憶を再び浮き上がらせることはなかった。

夢を追い求めるには老い過ぎて、達観するにはまだ若過ぎて、中途半端な心を絶妙に釣り合いの取れた天秤のように動かして、私は再び紫煙を胸にためる。

今の私はただ流動的に仕事をこなしているに過ぎないのかもしれない。

天秤は間違いなく、ゆっくりと達観した視野へと傾いているはずだからだろうか？　こんな夢を追い求めるような仕事を毛嫌いしているのは。

とは言え仕事だ、やるだけのことをしよう。

そう思い、大きく紫煙を口から吐き出し、席を立とうとして

私は、まさしく、幻想をこの目で見た。

小型の偵察機が何かと思った。

しかし長年カメラを通して培った目は、自身の認識違いであることを明確に表していた。

飛んでいた。

二人の人影が、一切の飛行機器をつけずに、空を200kmで滑空するへりを追い抜くスピードで。

一人は至って普通の青年だった。グレーのジーパンに赤のジャンバーを着こなし、肩にはカバンを担いでいる。

しかしもう一人は、まるで仮装舞踏会から抜け出したような、奇抜なスタイルだった。

赤と青を縦に割ったドレスを着て、スカートからはその配列が逆になっている、そう眉唾ものの雑誌によくある時代を先取りし過ぎた服装といえよう。

しかしその相貌は、まさしく、鳥肌が立つほどに美しかった。

「わ、わ、こっちみてますって八意さん」

「ええ、そうね」

幻聴ではないだろう、ないはずだ。

「そんな……馬鹿な」

隣から今にも崩れ落ちてしまいそうなほどに、震えた声を洩らしたのは、間違いなく池田だ。

振り返る必要もない、奴は口をきれいなO字に開けて間抜け面を晒

しているだろう。

体中がまるで金縛りにあったように硬直し、動かすことが出来ないのだろう。

頭は突然の理解不能な現実、完全に機能を停止させているだろう。

何故分かるだつて？ 分かるとも。

何故なら、今私がしていることだからだ。

天秤が大きく揺り動く

カタン、という音が心の中で波紋を広げる

私はその時、新しい夢を描いたのだった

それは私たちを追いつき、追い越し、雲の合間を突き切つて、消えた。

何も出来なかった、プロ失格だ。今思い出しても、そう思う。

「は、ははは。あはははは」

茫然自失、人が理解不能な状況に置かれたとき、最初に行われるのは冬の大地よりも乾いた笑い声だった。

全く滑稽だった。私たちが想像していた事態は、実際の斜め下であったことを嫌でも認識させられた。

だが、私は腐ってもプロ。

たとえ決定的瞬間を捉えることが出来なくとも、やれることは大いにある。

俺は振り返った、新しいおもちゃを与えられた子供のように、そして今しがた描いた夢を実現させるために。

激動は激流を呼び、熱烈になお痛烈に、胸に秘めた衝動を鎮めるために俺は声を張り上げた。

「おい！操縦士！」

「は、はいい！」

私の言葉にヘリの操縦士も、自失から復活したようだった。当然だ、あれはそうなるべきものだ。

「あいつらが消えてった方角は！？」

「はい！方位角127度・・・あ、これっは！？」

「なんだよ！さっさと言えよ！俺らエスパーでもなんでもねーんだぞ！」

操縦士の戸惑いに隣いた池田が、身を乗り出して問い詰める。
彼は何度も方位角を確認し、現在地を確認し終えたのちこういった。

「恐らくですが、例の会見の会場へと向かっているかと」

「・・・なに？」

「門松さん、これって」

「・・・本部に連絡しろ。目標を発見したってな」

門松 高次

このくたびれた30過ぎのおっさんは、後幻想郷を追い求める専門
カメラマンの第一人者となる。

が、それはあくまで余談である。

「八意さん！確かに俺はZUNさん記者会見に行きたいとはい
いました。いいましたけど！何もあそこから最短距離で飛ぶ必要ない

じゃないですかあ！！！」

強風に煽られながら、俺は非常に全うなことを言った気がする。

というか基本的に俺は全うなことしかいつてない。9割方八意さんが、常に俺の考える想像斜め45度を羽ばたいている。

そして俺はそれに振り落とされないよう必死だ、そう。今のようにな！

八意さんが伸ばす腕一本が、俺の生死を左右する。

それを俺は両手で握り締め、全身で風を感じる。痛いぐらい。時速で言つと300近くは出てるんじゃないだろうか？

新幹線並みの速度の頼みの綱は、片腕一本だけである、これひどいひどいと言うか、一回落ちている。上空1000？の時点を紐なし、パラシュートなしの自然落下。

無論八意さんがすぐさま助けてくれたが、俺は人生を一度、振り返ることが出来た。実にいい経験をしたと思う、もう二度としない。

というか今はそういう問題じゃない、俺は目立ちたくないんだ。

吉良吉影にまでなったつもりはないが、所謂俺は一般ピープル。

並みのハートしか持たない俺に、これ以上人の注目を集めないで欲しい。

しかしそんな俺の思いを裏切るかのように、八意さんは清々しいくらいにいい笑顔をして答えた。

「槐、さいかちあなた何か勘違いしてるんじゃないかしら？」

「・・・と、いうと？」

非常に嫌な予感がする。これは霊力持ち特有の、一種のよく当たる勘みたいなものだ。

そしてそれが告げている、彼女の次の答えは、俺の望むべきものではないと。

「私はあなたを幻想郷へ連れて行く、その交換条件で提示されたのがこの騒動」

全て言わなくても分かった、もう答えは得た。だがまだ確定はしていない、聞いてはいない。

俺は震える声で死刑宣告の先を促した。

「そ、それは……つ、つ、つ、つまりい」

「ええ、派手に幻想郷入りよ」

その瞬間彼女のスピードは俺の常軌を逸した速度で加速した。降りかかるGと、圧迫する冷たい空気、そんなさなか彼女を繋ぐ腕が唯一の温もりだった。

「ぬわあああ！！！！言うんじゃなかったあああ！！！！」

もっとも今の俺にはそれを堪能する余裕は、小指の甘皮ほどもない。ただただこれから起こるであろう凶事のプレッシャーと、降りかかる重力加速に耐えるので精一杯だった。

「神主さん、今こっちのツテで情報が入ってきました」

その言葉に軽く反応を示したのは、黒を基調としたハンチング帽、やや度の強い眼鏡をかけたスーツ姿の少々やつれた感じの男性だった。

神主と呼ばれる人物は黒のベンチに黙って腰掛け、友人の告げる次の言葉を待ってる。

その友人も急かされたように、次の台詞を言い放った。

「なんと、八意永琳と俺らの敵槐さいかち隆治りゅうじがこの会場に向かってきているらしいです」

その言葉を聞いた神主たる人物は、ベンチから立ち上がり会見する

であろう場所に視線を移す。

手先が震え、足の感覚もやや覚束無い。

それなりの舞台には彼も立ったことがある。だが、これはあまりにも異常だった。

用意された会場は総百人は軽く収容できる規模の会場、所謂大物芸能人の記者会見をするであろう場所。

並みの人間なら、見ただけでその場を覆う重圧に圧倒され、口を開くことすら間々ならない。そして彼は今からその場所で会見しなければならぬのだ。

神主たる人物は諦めにも似た吐息を大きく吐き出し、缶ビールを強く煽ったのだった。

10話 好きとかそういう次元じゃない(中編)(前書き)

長すぎたので中篇

別にサボってたわけじゃない、ただ長すぎただけなんだorz

ほんと、この話だけで通常の3倍あるよ

作業時間も3倍

苦行も3倍

そして恥かしさも3倍

俺、痛い

10話 好きとかそういう次元じゃない（中編）

もし、本当に幻想郷があつたとしたら、ZUN氏の存在とはなんだろうか？

俺はその素朴な質問を彼に投げかけたかった。

何のために、この作品を描いたのか？

本来なら聞くに値しない平凡な質問だろう。

だが現時点においては、いかなる問いを差し置いてでも聞かなければならないことだ。

幻想郷が存在すると認識して描いたのか？

それとも全くの無から、まさしく想像上から書き出したものが偶然にも一致したのだろうか？

はたまた彼自身が幻想郷を創り出したのか？

だから俺は少々無茶をしても聞いてみたかった、質問してみたかった。

バラバラバラ

不愉快な爆音に、俺は顔を顰めて意識の淵から這い出る。いい加減この強風にも慣れたいところだ。

ヘリがあちらこちら、絶えず動いているのが見て取れる。何を探しているか・・・は聞くまでもないんだろうなあ。

「八意さん、もしかして目的地近いですか」

「ご明察、あと5分26秒で到着できるわ」

いや、べつにそこ詳しく言う必要ないんですけどね。
そうか、もうすぐつくのか・・・

「え？どうやって降りるんだこれ？」

八意さんがゆつくりと高度を下げていって初めて気付いた。
恐らく俺たちの目指す目的地はアレだろうね。

正直言葉を失った。

会場があるう場所には、黒いものが絶えずうごめいている。
見間違いであつて欲しかったがそのはずもなく、会場を覆うような
大衆の海、そこに白く明るい島に見える場所には、撮影用のカメラ
が見て取れる。

どうやらライブ中継中のようだ。すげえ、この場で降りたら全国区
だな俺たち。

入り口付近には柵が設けられており、いまだ会見前というの感じさ
せた。

ぱつと見た感じ500人を超える人が詰め掛けている。
その人ごみが車道まで溢れているといったら分かりやすいのだろう
か？

とにかくその光景は、俺の心を意気消沈させるのには十分な人数だった。

正直、東方Projectという作品の人気を見くびっていた。

「さあ、降りましょう」

え？

そんな感想を抱いていた俺に、八意さんは死の宣告にも匹敵するよなことを言い放った。

あれのと真ん中を突っ切って、降りる？

各報道陣が勢ぞろいしている中を、俺たちは新庄よろしく上から降りてくるのだ。

かの野球選手との最大の違いは、屋外であり、尚且つワイヤーなし、という点だろう。

俺たちは、生い茂る草々を照らす新たな光、即ち太陽になるのだ！。もっとも光が強すぎて草とか燃えそうだから抗議とか凄そう、なくな。

思わず喉から搾り出したささやかな悲鳴に、八意は気にした素振りを見せず人の大海へと滑空していく。

まって、まだ心の準備が！

だがそれは俺の口から漏れることはなかった。

「うわぁ！なんだ鳥かよ！」

「ば、ちげえ！あれっておい！」

「ああ！ご覧ください！そこ！そこです！今ここに槐さいかち 隆治りゅうじが八意永琳に連れられ、空を・・・空を鳥の様に滑空して！見えてますか！」

「うっせえタコ、見えねえんだよ」

「何でてめえなんだよお！槐さいかち、死ね！」

「・・・・・・・・くそっ」

「いいなあ、俺も飛びてえ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ピンク？」

「え！マジ！」

その全ての喧騒の最中、俺と八意さんは会場の入り口へと降り立った。

「ど、どつも」

今だかつてない視線の結集に俺は身を竦ませ、シベリアの永久凍土に迷い込んだような寒気に襲われた。

俺と八意さんの間、半径１メートルの間には空白があり、それを囲むように迫る瞳。

誰も彼も、彼女も青年も少女も、その瞳は好意的なものは薄く、皆妬みに溢れひどく歪んで見えた。

「っう・・・」

これほどの黒い感情を、俺は一身に受けたことあるのか？

虫の大群が体中を蠢くような、生理的に無理とかそういうレベルでは収まらない不快感。

悪意の視線が俺の体を隅々まで撫で回し、胃に氷を叩き込まれたかの様な冷気が俺を襲った。

吐き気がしそうだった。

この状況に、どいつもこいつも恨めしそうに見つめるその視線に。慣れない感情の壮烈に思わず１歩後ずさりする、それと同調したかのように強まる周囲の敵意。

怯みがあいてを助長させ、強まる視線に怯えも加速する。

まずい、典型的な負の連鎖に嵌っている。

とは思ってはいるものの萎むのは俺の心だけで、一度沈みきった精神を立て直すには、沈ませる労力の１０倍は必要だ。

ただ俺は冷や汗を流しながら、必死に耐え忍んでいることしか出来ない。

「何でお前なんだ？」

どこかの誰かが声を上げた。

それに即応し、多くの声が上がりに始める。

「そうだ！お前じゃなきゃないんだろ！」

「幻想郷あるんだろ！？俺たちも連れていけよ！」

「一人だけ独占しようってか！この裏切り者！」

皆思っていたことが湯水のように溢れ出し、俺を窒息させよう迫る。ちくしょう！俺だって出来るもんならやってるよ！

だけど俺にどうしろってんだ？

幻想郷を管理するものを圧倒するような発言権もなければ、後ろ盾もない。

いや、八意さんが今は後ろ盾になっているかもしれないが、それにしたって弱すぎるし、大前提は俺はあくまで八意さんの客人でしかないはずだ。

そも彼女は幻想郷で、どれほど影響力があるのかもよく分かっていない。

そんな俺に独占？連れてけ？馬鹿いうな、お門違いだ。

世迷言は、幻想郷を管理している八雲紫あたりにふるんだな！

なんだってこんな怨まれなきやならんのだ？
なんだってこんな蔑まれなきやならんのだ？

いい加減にしろよ、お前らただの八つ当たりじゃねーか。

他人に何とかしてもらおうと考えるなよ、なんで自分で動かない？
お前らが動くのは口だけか、その二つついてる腕と足は何のために
存在してると思ってたんだ！

怒りの炎が小さく湧き上がったものの、それは吹き荒れる憎悪の前
にはあまりにも頼りない。

外の野次は最高潮、皆は妬みと憎悪の声が活火山の煙のように溢れ
出す。

集団の強みに酔い狂った連中に、正論を振りかざそうにも感情とい
う名のマグマの奔流に流される。

酔った人間と狂っている人間に正論で責めても意味がない。

それは相手が理性ではなく本能で行動しているからだ。

ならどうすればいいか？

前者は最近のませた小学生にでも答えは出せる、酔った人間なら水
をぶっ掛けたらいい。

話は実に簡単、相手はそれで目を覚ましてくれれば重畳。

しかし、狂った連中は、一体どうしたらいいのだろうか？

根っこの正気を失っている様な連中だ。

戻せる正気がないんなら、どうすればいいんだろうな？

収集がつく様子がないこの状況下、絶え間なく続く怒号。
しかしそれを遮ることの出来る人物が一人居ることを、俺は全く失念していた。

何かが俺と集団の間を壁にするように立ちふさがる。

とたんに静まり返る野次、薄まっていく敵意。
向けるべき憎悪を守るのは、憧れ羨んだ相手。
幻想の住人であるはずの人物。

八意永琳

彼女の出現に皆、上げるべき声を失い、口の中で噛み砕く。
ばつが悪そうに彼女から視線を外し、歯がゆい表情を浮かべる。
静まりゆく喧騒が、収まりゆく憎悪が、そこにあつた。
そして俺は八意さんの背を見つめながら、間違いなくほつとした。

ああ、これであの不快な視線から逃れられたと、何より俺は安堵した。

彼女に守られていることに。

そうして次に放たれた台詞に、俺の体は背骨に氷を叩き込まれるほどの衝撃を受ける。

「っ、あいつ女に守られて恥ずかしくねえのか」

・・・おい。あいつ、今、なんていった？

一切の音が、俺の中から消え去った。

「あのやろっ、永琳に守っていい気になってんじゃね？」

ああ、そうだ・・・確かに

俺は、彼女の背中を見て、安堵していた。

血の気が引く音を、傍目で見たように、傍観した自分が居る。

「永琳とあいつとじゃ、釣り合わないって」

その一言で、俺の頭が朱で染まった。

血の気が瞬時に引いたと同じく、それを上回る迅速で血がる。

先ほどまでの安堵は姿を消し、羞恥の感情が怒涛のように吹き上が

り、燻っていた怒りの炎が身を焦がす勢いで燃え上がる。

はじめは小さな火の粉くらいだった。

多くの敵意の前には心許ない矮小な灯りだ。

それが篝火のように燃え上がるのに、さして時間は必要ない。

恐怖を燃やし、怯えを焦がし、なお強く、さらに濃く。

俺の心を、怒りが怯えを糧にして燃え盛る。

おまえはなんだ？
おれ

おまえはどうしたい？
おれ

以前に言ったことを思い出せ、おまえは何を思ってたんだ？
おれ

全てのしがらみを犠牲にするんだろ

家も家族も会社も友人も、全て置き去りにしなければならなんだろ
それなら、不転進の覚悟で挑まなければ、ならなかったんだろ

何が、進んでやるだ、なにがやってみせるだ
恥ずかしくないのか？

ハングリーであれ 馬鹿であれ

俺の好きな言葉の一つだ。

確かに恥ずかしかったさ、恥ずかしい台詞だと今でも思うよ！だが、

なんだ！その中途半端さは！

悔いはないだって？

おまえ、幻想郷の思惑を垣間見たとき、恐れてたんじゃないのか？
結局、頭の中で妄想してただけで、心はついていってなかったんじゃないか？

今のおまえは馬鹿でもなんでもない、ただの臆病者の腰抜けだ！この半端野郎が！

女の後ろでぐずってる、体がでかいだけの漬垂れだ！

背筋を伸ばす、震える足を殴りつけ顔を上げる。

見えるのは彼女の背中、そのあまりに遠くみえる背中に一歩近づく。

俺には、何もかもが足りない。

覚悟も、意思も、決意も何もかも。

悔しくないのか、自分に

悔しくないのか、彼女に

彼女の傍に並び立つんじゃないのか
ならばやることは決まってるだろう

決める、今すぐに

泣き言ほざいてここを離脱するか
男を見せて連中に立ち向かうか

さあどっちにする、おまえは！

「……………うつせえ」

零れ落ちた俺の声を最初に拾ったのは、もつとも傍に居る八意さん
だった。

彼女は振り返える、まるで怯える子供を宥める様な、安心感を感じ
てしまいそんな表情で、

今はそれが、何より気に入らない！

「うるさい」

「？」

もういい、どうなってもいい。

敵意だらうが憎悪だらうが、今の俺には心底どうでもいい。
やるからには胸を張って、自分のした行動に責任をもって、そして
過去を振り返って豪快に笑おう。

八意さんの肩を掴んで押しのけた。

俺が再び前に出たことで、連中は再度嫌悪を滲ませる。

小出しにされていた野次が大きくなるのを感じた。

そしてそれを俺は鼻で笑う。

もう恐怖は感じない。

数で頼らなければ俺程度にしか息を巻けない連中の敵意なんて、何を恐れる必要がある。

気は腹にため、大きく息を吸い込み息と混ぜ合わせ、そして

[illegible]

だから俺が大きく攻勢に出ただけで、障子の紙を突き破るより容易く連中は狼狽している。

想像力のない昨今の連中をものに見事に体現した奴らだ、たいしたもんさ。

だが、今はそれありがたい。

この静まり返った会場前、こいつらが気を取り直すまで、俺の言いたいこと全て言い切ってやる！

視界の端に居る八意さんに意識を向ける。

そこにはどいつもこいつも阿呆面並べた連中とは一線を凌駕し、興味深い表情で俺を見ていた。

まるで、あなたにこの場を納められるのか、と言うのが如く不適な笑みを浮かべて。

いいさ、やってやらあ！

ここが俺の正念場だ、悔いなくやりきり黒歴史に葬り去ろう。

大きく息を吸い込み、四肢に力を蓄え、気力を練りこむ。

体の隅々が膨張したように緊張しきっている。

準備は完了だ、走り出したら中途半端にとまらない。

よし、行こう！

そして俺は怯んだ連中に向かって大喝した。

「俺は幻想郷に行く！お前らの望む場所にいく！お前らは俺が憎い

だろう、憎いだろうさ！もし俺が逆の立場だったら気が狂ってしま
うほどにな！」

何人かは気を持ち直し声を上げたが、何かを言う前に俺の叫びで上
書きする。

またあいつらに連帯とられたら今度いつ主導権を握れるか分かった
もんじゃない。

てめえら黙って俺の声だけ聞いてろ！

「何で八意さんはあいつを選んだか！？何で俺じゃないんだ！？と
かな！」

俺は以前言った。

この世界の全てのものを対価に捧げると。

ああ、捧げてやろうじゃないか。俺は今まで築き上げてきた信頼と
か信用ってやつを、全て生ゴミと一緒にゴミ箱に叩き込んでやる。
変わりに俺が受けるもの、それは

「けど俺はお前らの憎悪全て受け止めてでも、幻想郷へ！八意さん
の居場所へ行く！」

そいうわけだ、覚悟は出来ている。

俺の精一杯の決意の光に、眼力に周囲のガヤは着実に静まろうとし
ていた。

「妬ましいか羨ましいか！ああ、お前らは正しい！俺を存分に怨んでくれていい。いやむしろ怨め、お前らにはその権利がある！」

ここで俺は一度息を切り呼吸を整えつつ、周囲を見渡した。

今や最初にあつた余計なガヤも入れず、聞き入ってくれている。

誰もが俺に視線を向けているのにも関わらず、そこには敵意と呼ばれるものはあまりにも希薄だった。

そう、皆俺の声に真正面から向き合ってくれているのだ。

なあ、お前らはなんでこんなに騒ぎ立てていたんだ？

なんで俺をこんなに敵視していたんだ？

それよりも八意さんを見てみるよ、想像上の人物と思われていたのが現実にいるんだぞ？

ほら、もう俺なんかに構っている暇はなくなるな

けどな、なんとなく分かるよ。なんでこんなに騒ぎ立てたか。

お前らは大空を飛ばたく俺たちを、地上からでしか見ることが叶わない奴の気持ちを、理解して欲しかったんじゃないのか？ってね。

そうして俺は再び口を開く。

まだ、俺が本当に言いたい事をいつてない。

「その権利をどういう風に使っても構わん。ナイフ持とつが銃を担ごうが戦車もつてこようが、各自好きにしる！ハラワタ引き裂いて、頭に鉛球を処方して、戦車で体の面積引き伸ばしても、それでも俺の気持ちは変わらない」

さあそのときだ。

シヨンベンは済ませたか？神様にお祈りは？

まあ生憎どっちも済ませてない。だが覚悟は出来ている、もう今さらだ。

最高に恥掻いてるんだ、これ以上掻く恥は見当たらない。

「何故ならなあ。俺は八意さんが好きとかそういう問題じゃないんだ」

そうして腹に力を入れ、天に届けとばかりに空に向かい咆哮する。

「俺はな！八意永琳を……！愛しているんだあああああああ
あ！！！！！！！！！！」

すべての者が、呼吸を止めた。

顔は違えど揃いも揃って同じ表情を浮かべている。

こいつはこの場で一体何を言っているんだ、そんな顔で。

ああ『皆』だ。

そう、あの八意さんを含めて、皆口をポカーンと開けて機能を停止している。

八意さんの啞然顔って貴重じゃないか？

いや、本当に貴重だった。

俺が見て瞬き一つする間に、八意さんは表情を変えた。

「・・・・・・・・・・ツプ、クッククツ・・・・・・・・・・」

すなわち、破顔した。

今まで微笑むことはあっても笑うことがなかった彼女が、今俺の目の前で始めて、本当に可笑しそうに笑っていた。

は、ははは・・・

馬鹿だ。今の俺はまさしく。とんだ歌舞伎者だ。

けど上等だ、馬鹿で結構。

馬鹿じゃなかったら俺は八意さんに興味深い表情にさせることは出来なかっただろう。

馬鹿じゃなかったら俺は八意さんの作られた笑いを解くことは適わ

なかっただろう。

そう思うと酷く清清しくなった。
なんというか満ち足りた達成感という奴か。

仰ぎ見た天に視線を外し、後は地と人を見る。

でもやっぱり思うんだ。

俺は至って普通なんだ。

今はちよつと無理してるんだ。

こんな発言しておいて、この気持ちは全ての人に対して失礼だと心から思う。

だが今回ばかりは思わせてくれ。

ああ、死にたい・・・精神的に

「・・・・・・・・・・けど、けどなあ！俺も素直に死んでやらん、やるものか！そんな義理なんてねえよ！」

もうここまで来た、後は勢いだ。

やっちまえるだけ、やっちまえ！やけくそだあ！

「お前らが俺を怨む権利がある以上、俺にもそれを拒む権利がある。てめえらの厭悪全て乗り越えて、俺は行かせてもらうぜ！」

大きく両手を掲げ、最後の宣言をさせてもらっ
た。これが俺流のこの世界との告別式。
そしてこれこそが、俺の覚悟。

「多くの未知と夢の詰まった、幻想郷に！俺は行くぜえええ！！
！！！！！！」

胸を張って馬鹿になりきる。

これが無知な俺が、出来る全てだった。

10話 好きとかそういう次元じゃない（中編）（後書き）

次でラスト

俺はこの前書き後書きが書きたくてここまでがんばったんだ

10話 好きとかそういう次元じゃない（後編）（前書き）

ねんがんの えーりんとげんそうきょうにいけないぞ！

10話 好きとかそういう次元じゃない（後編）

周囲の言葉はない。

拙い息遣いだけが周囲の存在を感じさせ、この寒空の下に鳴く鴉の泣き声が俺をあざ笑うかのように響き渡った。

滅びきった空気、珍妙な緊張。

「・・・・・・・・ふっざけんな」

しかしそれも数十秒後、この一言を輪切りに決壊したダムの如き怒声の奔流が生まれた。

「ふっざけんなよてめえ！」

「怨めっていったのてめえだかなあ！」

「そこを動くなよ！」

「うはははは！阿呆だ！阿呆がいる！」

「うわーまじかよー」

「やべ、俺あいつに気持ちでまけた」

「そんなことどうでもいいから魔理沙に合わせろ！」

最初の喧騒を超えるような騒ぎと罵声が濁流になって襲い掛かる。だが、そこには最初の黒い敵意はなく、澄み切った紅蓮の怒りが俺を心地よく焦がしてくる。

「さいかち
槐」

その言葉に俺は周囲の雑音に耳も傾ける余裕はなくなった。いまここでダイナミック告白をした相手が居るのに、余裕持つ奴なんてどうかしてる。

「八意さん、あー、いやその」

思わず空笑いが出てきてしまいそうな状況に、俺は大衆から視線を外し件の女性と正面から向き合った。

彼女の姿を見たとき、そして今の心境。それは一遍の変化も見当たらない。ただひたすらに恋しく、そして憧れる。

彼女の一挙一動に俺の心は動かされ、振り回され、引き寄せられる。そしてそれを俺は楽しんでいるらしいのだ。はは、どんなマゾ野郎だよ。

傍から見たらさぞかしキモイだろうなあ。

俺が逆の立場だったら真面目に引くね。

けど改める気は全くない、というかその段階は先ほど通り過ぎてしまった。

むしろ引き返そうって言う気持ちこそ、忌避すべき精神だ。

ならあとは、わき目も振らず突っ走るだけだ。

その突っ走った先にあるのは、八意さん素敵な笑みだろう。

そう、今彼女は傍から見ても本当にイイ笑顔で笑っていた。

まるで心のそこから、面白いと思えるオモチャを見つけた少女のような表情で笑っている。

彼女の表情を見て俺は初めて悟りの境地を開けたような気がした。

ああ、いじられる。

俺はほんの数秒後、誰でもわかるであろう事態を予言し、そして外した。

「くく・・・あー、本当に笑わせてもらったわ。あなたって本当に・・・」

そこで八意さんは言葉を切った。

何故切ったか？

彼女の身に何か重大な事態が起きたのか。

しかし事実はそうではなく、というよりも彼女に何か起こったのでなく、

「・・・・・・つか、あ」

俺の身に起きた事だった。

最初は痛みなんてものはなかった。

ただ誰かに後ろから体当たりされただけかな、そう思った。

しかしそれと同時に何かの異物が体を突き抜け、俺はその衝撃に少々驚いた。

次に起きたのは異物によって体内を押しつけられるという不快感。

氷が体内に溜まっているような不思議な感覚。

もっと単純に言うと「吐き気がするぐらい気持ち悪い」といったら分かりやすい。

そして、その氷が灼熱のごとく熱を持つのにそう時間はかからなかった。

「・・・・・・・・・・うおお・・・・・・・・」

「痛い」というより「熱い」が正しい。

体に火鉢を押し付けられたかのような苦痛。

それと同時に俺の血と汗、涙。全てが高温の熱を持ったかのように沸騰した。

「・・・・・・・・・・やりやがった」

外野で何かが聞こえる。

そうして俺は初めて、自分が刺されているという事態を認識した。

痛い

冷や汗が止まらない、肺を膨らませると脇腹が鈍く軋む、心臓がやけに他雑に鼓動する。

その感情が俺の中の全てを濁流で押し流そうとするのを、理性の堀で必死に耐える。

後方を振り返りこの目で確認する事実、確かに俺は後ろのわき腹を何者かによって刺されている。

「……………てめえ、マジで……やるかよ」

「……………」

俺の言葉の投げかけにそいつは無言を貫き通した。

ただ腹部に感じる熱が、そいつの殺意を雄弁に語っている。

そうかなるほど、こいつも必死なんだな。

俺が八意さんに追いつこうと必死のように、こいつもこいつなりに俺に追いつこうと必死なのだ。

クラリと意識が一瞬飛びそうになり、それを必死に繋ぎとめ俺は血を脳へと送り込む。

まあその不器用さ、俺は全く嫌いじゃない。

「ああ……安心しろ、俺が、言ったように、お前には、その……
……権利があるんだ」

息継ぎが異様に辛い、喋るたびに脇腹がギシギシと軋み声を上げる
今この場で倒れてしまいたい

だが、それは出来ない
俺はこいつは嫌いじゃないが、こいつがやった事に、なにも共感で
きない

「・・・なあ、満足した、だろ？俺、を殺すこと、できて、満足、
出来るんだろ？」

熱い、だが体は冷たい、頭が酷く痛んでくる
風邪の初期症状のような異変、いかん、血が流しすぎている

しかし俺の瞳は俺を襲った輩から外さないし、外せない

なぜこいつは自分を変えようとしない
なぜこいつは他人の責任にする
それじゃ、何も変わらない

自分の世界、自分の価値観を変えなければ、周りが変われど自分は
何も、変わらない！

だが俺にそれを言う権利はない
そもそも煽ったのは俺だしな
けど言わせて貰う

他人に当たることですしか満足出来ない奴に

「だからてめえは、八意さんを諦めるんだな！俺が死んで、それに
満足したてめえが、幻想郷にいく資格ねえよ！」

奇々怪々な巡り合わせがあると思うなよ！

ぐちゅ

俺の中で何が発火した。

「がああああ！！！！！！！」

こいつ……！ナイフを、捻りやがった！

ほんのり薄れていた意識が一気に叩き起こされた。体の精一杯の警告を脳が強制的に受信する。いわく「これはまずい」と。

こいつを振り切ろうとした刹那、事態が再び一転した。

風が俺の傍を通り過ぎた。

瞬間に輩の体が宙に飛ぶ。

二転三転と、ダンプカーに轢かれたような派手な転げ方をして、10メートル先でようやく運動エネルギーを使い果たし指先一つ動かさずに力尽きている。

俺は、ただの人間には到底まねできない事を平然と出来る人物に視線を向け、凍りついた。

掲げた腕は物理的干渉が出来るほどの高密度の霊力に覆われて、彼女の体はその霊力に連動したかのように淡く輝き、奇抜なドレスと美麗な髪を撫で上げている。

その幻想的な姿と反比例するかのように、彼女の顔には一切の感情が見られない。

無表情の能面を顔に貼り付け、今しがた俺の脇腹にスタイリッシュなポケットを作ってくれた輩に、感情無き視線を投げかけていた。

そして八意さんは俺に視線を変える。

その視線に地獄の釜の底を覗き込んだような身を切るような恐怖に襲われ、俺は思わず身を竦ませた。

俺の怯えの感情に気付いたのか、八意さんは無表情の仮面を外し眉を八の字に曲げて俺に歩み寄った。

「傷口を見せなさい。簡易だけど、処置するわ」

彼女は腕に霊力を纏わせると、ナイフが刺さった脇腹を押さえつけ、ゆっくりと抜き始めた。

「あ、ああああ・・・」

なんだろう、ナイフと一緒に内臓まで引き抜かれていくような感覚に、俺の意識は再び白い霧の中へダイブしそうになる。しかし不思議と痛みは感じなかった。

彼女の霊力を纏った腕に押さえられた瞬間、痛みは灼熱の業火から湯沸しのポットぐらいにまで落ち込み、なんとというか、むしろ心地よくすらある。

そんな奇妙な異世界を僅かな間とは言え垣間見て、ナイフが完全に俺の体から離れたと思った瞬間、ぐちゃりと何か傷口に叩きつけられた。

「ぐえ！」

さらにその上に何か湿布の様なものを上から貼り付けられる。

「はぁん！」

「はい、付薬と護符を貼り付けたわ。今はとりあえずそれで我慢しなさい」

そう言って彼女は傷口に抑えていた手を離すと、痛みの鐘が再びゴ

ンゴンと鳴り出す。

だが、我慢できない程度ではない。

これ本当に簡易処置なのか、なんかもう直りかけのような気もしないでもない。

というか凄まじいまでの手際のよさだ。

幻想郷ではこれが普通なのか？

そんな疑問を浮かべていると、彼女は再び俺を刺した輩に視線を向け、無常に、無慈悲に、彼女は再び霊力を込め、動く気配すらない者に狙いを定めた。

.....

ってちよつと待て！

「八意さん……！た、たんま！」

「ああ、安心なさい。この程度の傷、一週間もせず完治できる」

「あ、そうですか。それはそれは……」

じゃ！なくて！

話の論点からして全く違う！

「いや、そうじゃなく！八意さん聞いてます！」

「なに？」

今だ視線を輩から離さず、八意さんは俺の質問に淀みなく答える。

「彼すでに満身創痍じゃないですか！これ以上の追い討ちは生死に関わるんじゃない」

「安心なさい、なにも殺しはしない。ただちよつと悔いを改めて貰つて」

「いや、でもその霊力は・・・」

「・・・気脈を狂わせ、まともな人間じゃなくなるだけよ」

おい、何怖いこといつてるんですかあ？
駄目だ、これ以上は駄目だ。

「八意さん、彼を治癒してもらってもいいですか？」

俺の一言に八意さんは視線を再び俺に変えた。

「彼はあなたを刺した。私の客人であるあなたに危害を加えた。なら然るべき罰を与える必要があるのではなくて？」

その表情はあの時のように能面の様に何の感情も見出せない。

しり込みする心に喝を入れ、俺も八意さんに視線を外さず物申す。

「さっき言った様に、彼には俺をなじる権利があります。そして彼は不器用ながらもその言葉に従った。そして何より、八意さん。これは俺の問題、俺が抱えるべき懸案なんですよ」

相変わらずその表情からは彼女の思惑は見取れない。
だがそれでも俺は俺を貫き通す。

「自分の言ったことに責任を取る。それは他人であれ、八意さんであれこの俺が許せない。けじめをつけれないのは、恥だ」

「…………あれが私の顔に泥をぬった、と言っても？」

「…………恥だ！」

視線が絡み合う。

意思と意思がぶつかり合い、互いにどちらの想いが強いかわかりあう。原初の動物ですら行っているような、この睨み合いをまさかこの場で、この人でするなんて思ってもみなかった。

「……………」

彼女の意思を感じさせない、無機物の壁を相手しているような威圧に、俺は効くかどうか分からない視線を叩きつける。

以前の俺なら思わず視線を背けていたのだろう、だがあの恥ずか痛い演説が俺の行き着く視点を失わせた。

心に踏ん切りがついた、俺は馬鹿でいい。

だから俺は馬鹿正直に俺の意思を八意さんに向けるだけだ。

「仕方ないわね、全く。本当、姫と似て変な所で頑固なんですから」

そうして折れたのは、八意さんだった。

鉄仮面の表情を外し、苦笑の笑みを浮かべて呟いた。

「はい？姫？」

「こつちの話よ、さ。じゃあさくつと治療して行きましょうか、幻想郷に」

そういつて曙スタイルで倒れている輩に彼女は近づいていく。

「え！？もう行くんですか、俺何のためにここまで・・・」

「医者の子がいうのよ、処置したとは言え今は「絶対安静」。さてすぐに戻って永遠亭で本格的な治療をするわよ」

「ええ、ああ、はい」

なんかもう俺流されてるんだけど。

小さくため息を吐き、頭をガシガシとかき乱す。

ここに来るときはこんな事が起きると思ってもよらなかったよなあ。
事実は小説より奇なり、を地で行ってるな。

そうして俺は蚊帳の外だった大衆を振り返る。

「じゃ！行ってくるわ」

片手を挙げてシュタッと挨拶をして、返事も聞かず八意さんに向けて全力疾走する。

「あ！ちよっ！待てやコラア！」

「てめえ何いい風に纏めてんだよ死ね！」

「あはははっはは！！！！」

足を動かすたびにズキズキと脇腹が脳みそに危険信号を送っているが今は無視だ。

自分なりの精一杯の走りで八意さんに追いつく。

「八意さん！OKですか！」

その言葉に彼女は霊力の籠った手を離して振り返り、不適な笑みを浮かべながら親指を天へと突きさした。

フライトの準備はOK。では皆様シートベルトを着用してゆっくり彼女の手を掴みましょう。

その瞬間慣れない浮遊感が襲い、俺たちは一瞬にして数メートル上空に浮遊する。

ああ、行くのか幻想郷に。

これほど派手に幻想入りっていうのもおかしなもんだ。

最後に、俺は雑多な喧騒に負けないほどの大声でこの世界に別れを告げる。

「うははははは！！！！！サラダバ諸君！まあちょっと行ってくる
！」

「うつせ！死ね！」

「変われこの野郎！」

「俺はお前を絶対に許さん、絶対にだ！」

「おーおー、やるねえ」

「ピンクーーーーっ！……！」

「もうお前死ねよ」

この喧騒ともおさらばか、そう思い俺は軽く笑みをこぼし、大空へと連れられ羽ばたいていった。

10話 好きとかそういう次元じゃない（後編）（後書き）

そう かんけないね

にア殺してでも うばいとる

ゆず^ずってくれ たのむ^む!!

な なにをする きさまらー!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2043y/>

東方槐無夢

2012年1月13日13時46分発行